

# 「お化け調査」が浮き彫りにする 人々の意識の基底構造

—アジア・太平洋国際価値観調査(APVS)の関連データの概説—

朴 堯星<sup>†</sup>・吉野 諒三<sup>†</sup>

(受付 2014 年 1 月 22 日；改訂 6 月 11 日；採択 2015 年 3 月 11 日)

## 要 旨

統計数理研究所では、1953 年以來の「日本人の国民性」調査や 1971 年以來の国際比較など、統計科学的標本抽出法に基づき各国の人々の意識について、調査研究を遂行してきた。その流れの中で、1970 年代後半頃より林知己夫を中心に「お化け調査」というニックネームの「基底意識構造調査」研究が展開され、例えば「合理派の人々 vs 合理派ではない人々」などのパーソナリティの分類について研究されてきた。本稿では、まず、林の基底意識構造調査の背景を説明し、その質問項目と成果について簡単に触れる。次に、筆者らの「アジア・太平洋価値観国際比較調査」の中で、「お化け調査」に関連する項目(素朴な宗教的感情、超能力や妖怪などに対する興味、死生観)について基礎データを概観する。

結果として、「お化け調査項目」について、日本人のデータに対しては林の先行研究と完全に同じやり方では「合理派の人々 vs 合理派ではない人々」のパーソナリティの分類は明確ではないものの、概ね、同様の分類の傾向は確認された。他の国でも概略的には同様の傾向が認められる一方で、詳細には各々の国・地域で異なる様相が見られ、単純に、1つの共通尺度で各国・地域の人々の心の基底構造を定量的に深く解明することができるとは考え難く、幾つもの課題が示唆された。本稿は意識の国際比較の基礎データの一部を概観し、幾つかの課題を示唆するに過ぎないが、これが近い将来、日本人の「意識の基底構造」に関する先行研究の再考を含め、各国の人々の「意識の基底構造」の解明へつながることを期待する。

キーワード：無作為標本抽出調査，アジア・太平洋国際価値観調査，死生観，宗教的感情，お化け調査，文化多様体解析(CULMAN)。

## 1. 「お化け調査」と「基底意識構造」

2011 年 3 月 11 日の東日本大震災から 1 年ほどたって、「『幽霊見える』悩む被災者」との新聞報道があった(産経新聞，東京，2012 年 1 月 18 日朝刊)。ほぼ同時期に、1995 年の阪神・淡路大震災の遺族へのアンケートの記事もあり、東日本大震災によって、再び、大切な家族を失った当時の悲しみが思い出されている人々の様子が伝えられた(神戸新聞，2012 年 1 月 13 日朝刊)。大きな災害によってもたらされた各地の人々の生活は、心身ともに、まだまだ落ち着かぬものがある。家族や親族、大切な人を失った経験、路傍の至る所に多くの遺体を見た経験は、人々

---

<sup>†</sup> 統計数理研究所：〒190-8562 東京都立川市緑町 10-3

の心の奥に深い傷を残していることであろう。

統計数理研究所では、1953年以來の「日本人の国民性」調査や1971年以來の「ハワイ日系人調査」をはじめとする国際比較など、統計科学的標本抽出法に基づき各国の人々の意識について、調査研究を遂行してきた。その流れの中で1976年頃より登場した「お化け調査」というニックネームの「基底意識構造調査」研究は、故・林知己夫を中心に、統計数理研究所の水野欽司、駒沢勉、林文、鈴木達三、所外からは鮎戸弘、上笹恒、杉山明子、鈴木裕久、岩男寿美子、丸山久美子、堀洋道らのMDS研究会のメンバーによって始められたものである(林編、1979a)。ニックネームだけからは、一見、戯れたものに思え、時折、例えばお盆の前のコラム記事にしようと思ったのか、この調査に関してマスコミから筆者らも興味本位の取材を受けることもある。しかしながら、多数の関連資料を送ると、戯れどころか調査技術や心理学的に深遠な学術研究と分かると、安易には記事にできないと思ひ簡単に諦める記者もいる。

この調査の背景には、林知己夫の次のような考えがあった。林は、日本の戦後の科学的な世論調査や各種の標本抽出調査を創始、確立、発展させてきた、中心人物であった。しかしながら、特定の事項の賛否を問う通常の世論調査では人々のタテマエが出てくるので、その本音をつかむのに限界を認識していた。勿論、タテマエだからといって無価値なのではない。政治は大義名分というタテマエで動く。世論調査の結果は民主主義政治のための重要な基礎情報であり、その調査結果が戦争の開始や阻止というような重要政策につながることもある。しかし、他方で医療や環境、国際関係を含む、複雑な社会問題に対処するためには、人々の心の奥にある生命観、自然観、宗教的感情、死生観などに触れずには、本当の解決は難しいこともある。そこで、一歩進んだ工夫で人々の「意識の基底構造」を垣間見ようと意図し、「お化け調査」と称する、通常の世論調査とは趣が著しく異なる調査で、素朴な宗教的感情、迷信や言い伝え、死に対する感情などを問うことを試行した。

世論調査においては、日本人全体及びその中の特定の集団における意見分布を解析することは基本の1つである。例えば、どういう集団がどの政党や政策を支持しているか反対しているか、次の選挙でどの政党に投票するか、等々を特定することは肝要である。世論調査、医療調査を含め、多くの調査結果で男女間の差、年齢層間の差、都市部と地方の住民間の差など外的属性(外から特定できる性質)による差が出るのは経験的によく知られているので、これらの属性クロス分析は、調査データの解析の基本である。そして、さらにどのような属性が、回答分布の差をもたらすかを追求するのは自然である。林の初期の国際比較でもこの課題と往時の結果について触れられている(林、1981、図6と本文解説)。

しかしながら、その結果はその後の国際比較調査研究の進展の中で、必ずしも、毎回の各国調査で安定して確認されたのではなかったのであろうし、また、時代の変化の影響もあり、確定的な結論を得ることは自明なことではなかろうと推察する。

ところが、その後の「お化け調査」の解析によって、大きな展開を迎える。通常の世論調査のように社会的望ましさ(social desirability)が大きく入り込む人々の「意見」ではなく、人々が各人の興味や感情を表す「態度」に着目し、性別や年齢層、学歴、職業などの外的属性を越えた人々のパーソナリティの分類(「合理派の人々」vs「合理派ではない人々」)の特定へと進んだ。その上で、さらに1990年代初めにはガン告知の是非の問題、病氣治療におけるそのパーソナリティの影響に関する研究などの医療問題(林、1996)や、原子力発電所に関する住民の意識調査(林・守川、1994)へ発展した。(なお、統計数理研究所の数研リポートNo.45には、「選挙意識の感情構造」に関する解析があり、血液型と政治意識の傾向について報告されているが、今から見れば、それはほぼ同時期に並行して進められた「お化け調査」研究と結びつく先駆的研究の1つとして位置づけられるかもしれない。)

本稿では、林の深遠な統計哲学と高度な解析を扱うことはできないが、筆者らが現在遂行中

のアジア・太平洋価値観国際比較で既に得られている5か国・地域のデータの中で、「お化け調査」に関連する幾つかの質問項目とその回答分布データについて、概観してみよう。特に、林の「合理派の人々 vs 合理派ではない人々」などのパーソナリティの分類について国際比較の文脈で関連するデータを検討し、各国固有の尺度構成を目指す際の基礎情報の確認を試みよう。これが、近い将来、林の先駆的研究の国際比較版へと昇華する研究の一步となることがあれば、本稿の目的は果たされたことになるだろう。

以下、2節では、林の「お化け調査」に用いられた質問項目とその成果について簡単に触れる。3節では、筆者らの「アジア・太平洋価値観国際比較」における「お化け調査」関連項目（「素朴な宗教的感情」、超能力や妖怪などに対する興味、死生観に関連する質問）について、概説する。4節では、「意識の基底構造」に関連する項目のデータについて国際比較を試行する。まず、単純集計、属性別クロス集計などで、国別の様相を眺める。次に、数量化Ⅲ類を活用して、各国の様相を概観する。最後に5節で、将来の研究の発展について触れる。

なお、本節の分析に用いる調査データについては、質問項目の各言語版、各国・地域の標本抽出方法を含め、詳細は調査研究リポート No.103 から No.106 (吉野・二階堂 編, 2011a, 2011b, 2012; 吉野・芝井 編, 2012) または <http://www.ism.ac.jp/editsec/kenripo/index.html> を参照願いたい。特に日本語調査票と提示カードについては、調査研究リポート No.103 (吉野・二階堂 編, 2011a) 及び <http://ismrepo.ism.ac.jp/dspace/bitstream/10787/2866/1/kenripo107.pdf> の pp.172-208 に示されている。

## 2. 「お化け調査」の背景

林らが1975年頃から東京都23区と米沢市の市民を対象として試行し始めた「お化け調査」では、超自然のものについて尋ねた質問は、UFOや雪男などの近代的なもの、幽霊、人のたたりなどの精神的なもの、カッパ、龍などの架空の生き物を12種類あげ、その各々について、「存在(いる・ある-いない・ない)」、「期待(いてほしい・あってほしい-いてほしくない・あってほしくない)」、「情緒(こわい・おそろしい-こわくない・恐ろしくない, 楽しい・おもしろい-つまらない)」という8つの言葉を上げ、最もびったりする言葉を選択させた。世論調査のような場合に賛否を選択させる場合、いくつもの次元(事象の各側面)の選択肢が混在しているのは回答者を混乱させ、また回答分析にも困難をきたすので、各次元を整理して、個々の質問では1つの次元を問題にすることが多い。それを考えると、このお化け調査は、存在や情緒、期待などいくつもの次元を同時に提示し、表面上、拙い質問である。しかし、それこそが狙いであり、回答者が混在する幾つもの次元の中で、どの次元に反応するかを捉えるのが目的であった。

結果は、どの対象についても最も多かったのは「いない・ない・ばかばかしい」であり、存在を肯定するものはさすがに少なかったが、興味や期待の感情は、特に近代的なものに対して比較的多かった。そのような関心は、米沢よりも東京、若い年齢層、さらに(年齢との相関はあがるが)高学歴の方が高い傾向が見られた。

鮑戸(私信, 2013年9月4日行動計量学会大会特別セッション「アジア・太平洋価値観国際比較」にて)によると、当時の結果では、若年層はUFOや超能力など近代的なものに対して、高齢層は伝統的なものに対する興味が強くみられた(林 編, 1979a)。1970年代半ばから80年頃は、ユリ・ゲラーのスプーン曲げなどの超能力についてのテレビ番組が盛んに放送された時代であった。

同様に、迷信に対する意識についても、「信じているかどうか」ではなく、「気になるかどうか」を尋ねている。「信じてはいなくても、気になる」という感情、つまり関心を示すものとして観ることが、心の基底構造に触れると考えられた。仏滅の結婚式、友引の葬式、悪い方角への移

表 1. 「あの世を信じる」人の割合(年齢層別%) (問#3.5). 出典: 第 2 次と第 12 次「日本人の国民性」調査結果より. [http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3.1/3.1\\_all.htm](http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3.1/3.1_all.htm)

	信じる	(男, 女)	きめかねる	信じない	他・DK	合計
1958年						
全体	20	(17, 23)	12	59	9	100
20-34歳	13	(13, 13)	13	66	7	100
35-49歳	19	(17, 20)	11	62	8	100
50-64歳	33	(23, 42)	10	48	10	100
65歳以上	35	(17, 42)	16	29	20	100
2008年						
全体	38	(32, 44)	23	33	6	100
20-34歳	46	(39, 52)	20	30	4	100
35-49歳	41	(36, 45)	23	29	7	100
50-64歳	36	(30, 42)	22	37	5	100
65歳以上	32	(25, 38)	25	33	9	100

転, 北枕, 三隣亡について, 「たいへん気になる」または「少し気になる」人が東京でも 3 分の 2 以上あり, この率は, その 20 年ほど後の 1996 年調査でもほとんど変わっていない(林, 2004). 吉野 編(2005c)の「日本調査 2004B」でも, ラッキー・ナンバーや悪い夢や悪い方角への引越しなどの項目が調べられている. これは日本の全国調査であるが, やはり「たいへん気になる」または「気になる」が半数以上を占めている.

このように科学的に説明しきれないものに対する関心は, 表面上の論理では片付かない素朴な感情であり, 現代もかなりの人が持っている特性といえるのではなからうか.

統計数理研究所が 1953 年から 60 年以上にわたって実施してきた「日本人の国民性」調査では, 長期にわたる継続質問項目によって, 日本人のものの考え方の変化の様相を明らかにしている. 林文(2010)は, その中で「#3.5 あなたは「あの世」というものを, 信じていますか?」という質問項目について, 半世紀を隔てた第 2 次調査(1958 年)と第 12 次調査(2008 年)との結果を比較している(表 1 [ただし, 一部は筆者が追記]).

まず, 1958 年と比べ 2008 年には「あの世」を「信じる」と答える人が倍増, 「信じない」が半減という傾向はすぐに分かるであろう. 「決めかねる」も倍増である. 男女別では, いずれの時代のいずれの年齢層においても「信じる」と答える割合は女性の方が男性よりも多い. 年齢層間で差違の変化が顕著であり, 50 年前は若者の方が高齢者よりも「信じる」の割合が少なかったが, 現在は逆転している.

この回答の変化について, 幾つかの解釈があり得る. 1 つには, 社会や教育が急変する戦中, 戦後に幼児・青年期を過ごした世代は, 日本人全体の中でその前後のいずれの世代とも異なる価値観を持つ特異なコホートを成し, 宗教などに対して懐疑的な傾向が観察されてきたことがあげられる(Yoshino, 2013). そのコホートは, 50 年前に若者であり, 現在は高齢者になった.

他の解釈としては, 日本では 1970 年代くらいまでは欧米流の近代化への過剰なほどの思い入れがあったが, 高度成長に伴う環境問題の生起, オイルショックなどの事件を経て, 冷静に反省されて, その後, 心の深層においても変化をもたらしてきたのかもしれない. 残念ながら, この質問は 50 年間継続的には用いられていなかったために当該のデータだけからは解析に限界がある. いずれにせよ, ここに改めて, お化け調査が示唆する社会の様相に注目する意義が浮かび上がってくる.

お化け調査では、人々の自然観、死生観、宗教などに関する人々の意識の深層を垣間見ようとしており、狭義の科学性や合理性を軸とした近代的な価値観の肯定、否定と密接に関係している。現行の科学性や合理性といった近代的な価値観は欧米主導のものであるが、その近代的な価値観は、時代の変化に伴い、その意味が変化しつつある。世界の政治経済の中での欧米の勃興や凋落とも無関係ではなく、例えばベック(1998)が指摘した近代化の崩壊とも関連があるかもしれない。そのような時代の変化と、そのようなものを超えた各国や地域の人々の心の深層にある普遍的なものとの相互作用の中で、人々の表層の意識や意見が表れてくるのではないだろうか。

その意味で、東アジアにおいても、近代的な価値観に対する考え方や意識は、程度の差こそあれ、各国の文化、歴史、宗教、価値観、そして現在の政治経済的状况による差異がみられるかもしれない。

### 3. アジア・太平洋価値観国際比較調査の「お化け調査」関連項目の概要—日本人の「素朴な宗教的感情」、超能力や妖怪などに対する興味、死生観—

「アジア・太平洋価値観国際比較調査」(吉野・二階堂 編, 2011a, 2011b)では、「文化多様体解析(Cultural manifold analysis, CULMAN)」(吉野, 2005a; Yoshino et al., 2009)と称して、文化や生命観などに関する多様な質問項目を取り入れているが、その間 33 の神仏や死後の世界や霊魂の存在についての質問、問 26 の超能力など超自然に関する興味の質問、さらに問 39 の死生観に関する質問が、林の「お化け調査」に密接に関連している。本節では、これらについて、項目別に単純集計や、性別、年齢層、学歴等の属性クロス集計を概観してみよう。

年齢層や学歴の区分については、絶対的に定まっているわけではなく、様々な可能性はあるが、本稿では年齢は若年層(34歳以下)、中年層(35-49歳)、高年齢層(50歳以上)、学歴は低(中学校卒以下)、中(高校卒)、高(短大卒以上)の3区分に再カテゴリー化した。

#### 3.1 「素朴な宗教的感情」

林知己夫とともに「お化け調査」研究を発展させてきた林文(2006)は、占いなどは特定の宗教とは必ずしも直接は関係があろうとなかろうとも、人々が生きていくうえでなんらかの指針として気にしたり頼りにしていたりすることを、「素朴な宗教的感情」としている。本研究でも同様の意味で、この言葉を用いよう。この「素朴な宗教的感情」は、おそらく、現在の世界的な一神教や多神教が確立する以前にあった各地での精霊信仰、祖先崇拜などと密接なもので、さらに言えば、表面上は仏教、キリスト教、イスラム教などの世界宗教が支配的な地域ですら、実は人々の心の深層、意識の基底には各地固有のその「素朴な宗教的感情」が息づいているのではないかと推察される(武光, 2009)。

これに関連して、まず、図1の項目がある。

問33では、「a. 神や仏」、「b. 死後の世界」、「c. 霊魂(たましい)」の存在について尋ね、それぞれの項目に対し、回答選択肢は「1. 存在する」、「2. 存在するかもしれない」、「3. 存在しない」となっている。(注。2節の表1で見たように、「日本人の国民性」調査では、「信じる」か否かを尋ねている。)もとの3つの選択肢への回答の分布は吉野・二階堂 編(2011a)にあるが、ここでは、「1. 存在する」と「2. 存在するかもしれない」を合わせ、「存在を否定しない感情」とみて考察してみよう。(本稿では、以下、便宜上「肯定的回答」と表現するが、それは「存在を否定しない」という意味であり、この微妙だが重要な区別には十分留意しよう。敢えて言えば、科学的には単純に信じるというのではないが、それでもなおかつ気になる、否定しがたい感情に密接に関係していると思われる。)

問 33 [カード 25] 次にあげるものを、あなたは「ある」または「存在する」と思いますか。

それぞれについてお答えください。(1 つずつ聞く)

- a. 神や仏
- b. 死後の世界
- c. 霊魂(たましい)

1. いる・存在する, 2. あるかもしれない, 3. ない・存在しない

図 1. 「素朴な宗教的感情」に関連する問 33 の項目一覧.

表 2. 日本人の「素朴な宗教的感情」に関連する問 33 への肯定的回答の率(%). ※肯定的回答の率は、「存在する」あるいは「存在するかもしれない」の回答を合わせた率.

	全体	男性	女性	若年層	中年層	高年齢層	学歴低	学歴中	学歴高
a. 神や仏	81	72	89	81	85	79	80	83	79
b. 死後の世界	70	62	77	78	82	62	56	70	73
c. 霊魂(たましい)	81	72	89	89	87	75	76	82	81

表 2 をみると、日本では全体として、「a. 神や仏」や「c. 霊魂(たましい)」の存在については 8 割、「b. 死後の世界」については 7 割の人々が、肯定的回答を示している。a, b, c いずれの項目についてもいずれの世代や学歴層も概ね肯定的回答の率が高い。比較的「b. 死後の世界」について低学歴層や高年齢層がやや低めの数字を示しているのは目立つ。しかし、それでも 5, 6 割以上の肯定的回答の率である。

半世紀以上にわたる「日本人の国民性調査」([http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3\\_1/3\\_1\\_all.htm](http://www.ism.ac.jp/kokuminsei/table/data/html/ss3/3_1/3_1_all.htm))で、日本人の中で宗教を持っている割合は、世界の流れと同じく多少とも世俗化が徐々に進んでいるが、概ねは長年にわたり 3 割前後で推移している。一方、宗教をもっているか否かに関わらず、7 割ほどの人々が「宗教心を大切に思う」という傾向は変わっていない。こういったデータは、多くの日本人は特定の宗教を持っていないことも、宗教的な心や、林(2004, 2010)の言うところの「素朴な宗教的感情」を持っていることを示唆している。

さらに、項目ごとに詳細を確認しよう。まず「a. 神や仏」については全体の 8 割ほどが肯定的回答であるが、男女間では女性の方の率が高い。一方、年齢層別では 34 歳以下の若年層、35 歳～49 歳の中年層、50 歳以上の高年齢層の年齢層間にはあまり差はみられない。学歴別においても差はあまりない。したがって、性別により多少の程度の差があるが、いずれにせよ、大方の人々が神仏の存在には肯定的回答をしている。

次に「b. 死後の世界」については全体で 7 割が肯定的回答で、前述の「a. 神や仏」よりも若干低い。男女別では男性 6 割強に対して女性が 8 割弱であり、差がみられる。年齢層別では若年層、中年層とも 8 割前後であるが、高年齢層は 6 割強とそれらよりも低い。この 50 歳以上の高年齢層については、前述の「a. 神や仏」の存在の肯定的回答が他の年齢層同様に 8 割近くであるのに対し、この「b. 死後の世界」の存在を肯定する回答が 6 割程度というのは興味深い。こ

問 39 【カード 28】次に、人生や死についての考え方をあげてあります。あなたはどのように思われますか。

それぞれについて「そう思う」か「そうは思わない」か、お答えください。

	そう 思う	そうは 思わない	どちらとも いえない	わ  か ら な い
a. 自分はなにか大きな見えない力によって「生かされている」という実感がある……………	1	2	3	9
b. ある人が、どこで生まれ、いつ死ぬかは、その人の運命によって決まっており、人の力では変えられない…	1	2	3	9
c. 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ……………	1	2	3	9
d. 自分が死んでも、自然の一部になって生き続けることができる……………	1	2	3	9
e. 人類全体の進歩と幸福のために、自分でできることをやってみたい……………	1	2	3	9
f. 自分を犠牲にしてでも、その人のために尽くしたいと思ったことがある……………	1	2	3	9
g. 自分の主義主張のために死ぬことは、立派なことだ…	1	2	3	9
h. 自殺するとき、自分の子供を道連れにする人の気持ちは、よくわかる……………	1	2	3	9
i. 恋する者どうしが心中する、ということは美しい……	1	2	3	9

図 2. 「死生観」に関連する問 39 の項目一覧。

れら二つのテーマは、宗教的感情に密接に関連するものであろうが、「神仏の存在は否定しないが、死後の世界の存在は否定する」という人々が高齢層に少なからずいることを表しており、考察の余地があるだろう。表 1 の説明で、戦中、戦後に幼児・青年期を過ごしたコホートの宗教に対する懐疑的意識について注釈した。「神仏」の存在を信じるといっても、必ずしも既存の宗教の神や仏とは限らないこともあろうし、各宗教によって「死後の世界」の説き方は様々である。この点は、後述する国際比較の表 6 で「宗教をもつ人、もたない人」の区別と「存在を否定しない人」のクロス表も示唆することが多かろう。

学歴別は年齢と関連するが、肯定的回答の率は高、中、低の順で、学歴が高い層の方が肯定的回答の率が高い傾向がみられる。

先述の「日本人の国民性」調査(表 1)では、「あの世を信じるか」と問い、本節のアジア・太平洋価値観国際比較では「死後の世界の存在」の肯定、否定を尋ね、肯定的回答(実は「存在を否定はしない感情」)の率を調べた。「積極的には信じないまでも、敢えて否定はしない」という「素朴な宗教的感情」の一側面が示唆された。

### 3.2 死生観

次は、日本人の死生観に関連した質問(図 2)の結果を示す(表 3)。

WHO(世界保健機構)では、「健康」の定義の更新を巡る長い歴史があり、その初期の定義の「身体的、精神的、社会的、心理的」側面から、近年では「霊的(スピリチュアル)」な側面も視野に入れた拡張がなされてきた。我々の調査で死生観に関する項目を導入した背景には、この WHO の

表 3. 日本人の死生観に関する問 39 への回答の率(%)。

a. 自分は何か大きな見えない力によって「生かされている」という実感がある									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
そう思う	50	45	55	45	56	50	40	48	55
そうは思わない	47	52	41	53	42	46	56	48	43
どちらともいえない	3	3	4	2	2	4	4	4	2
b. ある人が、どこで生まれ、いつ死ぬかは、その人の運命によって決まっており、人の力では変えられない									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
そう思う	59	50	67	51	49	66	73	61	52
そうは思わない	40	49	32	48	49	34	26	38	47
どちらともいえない	1	1	1	1	2	1	1	2	0
c. 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
そう思う	35	25	44	45	47	26	29	33	38
そうは思わない	62	72	53	54	51	70	66	63	60
どちらともいえない	3	3	3	1	2	4	5	4	1
d. 自分が死んでも、自然の一部になって生き続けることができる									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
そう思う	31	26	35	37	32	28	33	30	31
そうは思わない	65	70	61	63	65	66	60	65	68
どちらともいえない	4	4	4	1	3	6	7	6	0
e. 人類全体の進歩と幸福のために、自分でできることをやってみたい									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
そう思う	76	72	79	70	80	76	67	76	78
そうは思わない	21	25	18	28	19	20	26	21	21
どちらともいえない	3	3	3	3	1	4	7	4	1
f. 自分を犠牲にしても、その人のために尽くしたいと思ったことがある									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
そう思う	64	64	64	67	69	60	62	61	67
そうは思わない	32	33	32	32	28	35	33	32	32
どちらともいえない	4	3	5	1	3	5	5	6	1
g. 自分の主義主張のために死ぬことは、立派なことだ									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
そう思う	22	31	14	27	19	22	21	17	29
そうは思わない	75	68	83	72	78	76	76	80	71
どちらともいえない	3	2	3	2	3	3	4	4	1
h. 自殺するとき、自分の子供を道連れにする人の気持ちは、よくわかる									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
そう思う	9	8	10	7	4	12	23	8	7
そうは思わない	88	90	87	92	94	85	73	89	93
どちらともいえない	2	2	3	2	2	3	4	4	1
i. 恋する者同士が心中する、ということは美しい									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
そう思う	5	5	5	5	2	6	10	4	5
そうは思わない	94	94	94	94	98	92	87	95	95
どちらともいえない	1	1	1	1	0	2	4	1	0

研究をも視野に入れて、文化や宗教の異なる各国の人々の死生観、生命観などを探索し、広い意味での人々の「健康」について模索するという動機があった(吉野, 2008; 吉野 他, 2010, p.101)。

この質問は a から i までの多数の項目を扱っており、それぞれが深い内容を含んでいて、結



問 26 【カード 19】世間でときどき話題になることをおうかがいします。このカードにある「超能力」や「空飛ぶ円盤」などについて、あなたはどんな感じをもちますか。1 から 8 までの言葉をよくごらんになって、それぞれについて、あなたの気持ちにもっともピッタリする言葉を 1 つずつ選んでください。

	つ ま ら な い	い て ほ し い	あ っ て ほ し い	い る ・ あ る	こ わ い ・ お そ ろ し い	あ っ て ほ し く な い	お も し ろ い	い な い ・ ば か し い	こ わ く な い	お そ ろ し く な い
a. <small>ちやうのうりよく</small> 超能力や念力……………	1	2	3	4	5	6	7	8		
b. 空飛ぶ円盤や宇宙人……………	1	2	3	4	5	6	7	8		
c. <small>やうかい</small> 妖怪や鬼……………	1	2	3	4	5	6	7	8		
d. <small>ゆうれい ぼうれい</small> 幽霊や亡霊、人のたたり…	1	2	3	4	5	6	7	8		

図 3. 「超能力や自然現象に対する興味」に関連する問 26 の項目一覧。

果を簡略にまとめられるようなテーマではない。また各項目の文章表現が、本来の調査で意図したテーマとしては、今日の社会事情など考えると、必ずしもベストの表現とはなっていない可能性もあり、表面上の数字だけからは適切な解析は容易ではなからう。

ここでは、a についてだけ触れておくと、全体の半数が何か大きな見えない力によって「生かされている」と回答している。男女別では、女性は肯定的回答が男性よりも 10%ポイント程度高い。年齢層別では若年層の肯定的回答が最も少なく、中年層が最も多く、その差は 10%ポイント程度である。学歴別では、低・中・高の順で肯定的回答の率は高い傾向である。

「大きな見えない力」という概念は、スピリチュアルなイメージを彷彿とさせる。この結果は、日本人の自然観、自然への畏怖といった自然崇拜傾向と密接な繋がりががあると推察され、これもまた、「素朴な宗教的感情」の一側面に触れているのであろう。

### 3.3 超能力や妖怪などに対する興味

問 26 では、超能力や妖怪などに対する興味について尋ねている(図 3)。

問 26 のもとは林知己夫らの 1976 年と 1978 年の東京都 23 区と 1977 年の米沢市での調査であり、12 種のお化け・怪力乱神などに対する感情を尋ね、MDS による分類を行っている(林 編, 1979a, p.94)。吉野はそれを参考に、アジア・太平洋価値観国際比較調査では、上記 a, b, c, d の 4 項目を扱う形にした。また、林らは数量化 III 類により、選択肢間の関連を考察し、これらの選択肢を「心のかかわり合い」と「心をわずらわせない」と分けて、これが後に「合理的態度」と「合理的ではない態度」の 2 つの内在的次元を形成することを特定している(林 編, 1979a, p.102)。その結果を踏まえて、回答者が選択肢「1. つまらない」または「7. いない・ない・ばかばかしい」を選んだ場合を「合理的反応」とし、他方で選択肢「2. いてほしい・あつてほしい」, 「3. いる・ある」, 「4. こわい・おそろしい」, 「5. いてほしくない・あつてほしくない」, 「6. たのしい・おもしろい」の 5 つの選択肢のうちのいずれかを選んだ場合については「合理的では

表 4. 日本人の超能力や妖怪などに対する興味に関する問 26 への回答の率(%)。

## a. 超能力や念力

	全体	男性	女性	若年層	中年層	高年齢層	学歴低	学歴中	学歴高
感情的反応	66	62	70	85	75	56	48	65	72
合理的反応	34	38	30	15	25	44	52	35	28

## b. 空飛ぶ円盤や宇宙人

	全体	男性	女性	若年層	中年層	高年齢層	学歴低	学歴中	学歴高
感情的反応	66	64	68	83	82	54	48	63	76
合理的反応	34	36	32	17	18	46	52	37	24

## c. 妖怪(ようかい)や鬼

	全体	男性	女性	若年層	中年層	高年齢層	学歴低	学歴中	学歴高
感情的反応	58	53	63	78	73	45	44	55	66
合理的反応	42	47	37	22	27	55	56	45	34

## d. 幽霊や亡霊、人のたたり

	全体	男性	女性	若年層	中年層	高年齢層	学歴低	学歴中	学歴高
感情的反応	70	63	77	85	84	59	52	71	75
合理的反応	30	37	23	15	16	41	48	29	25

ない反応」として扱っている。(便宜上、本稿の以下では、後者を「感情的反応」と称すが、「合理的ではない」と「感情的」であることは必ずしも同じではなく、厳密な区別が必要な可能性にも留意しておく。)

林文のデータ解析の試行錯誤(林 編, 1979a, p.124)では、選択肢「8. こわくない・おそろしくない」については該当者が少なく、合理的な人々と合理的ではない人々の区分からは外れ値になるので除外していることに注意する。本節でも、これに倣おう。(ただし、4 節の国際比較の文脈の中では、これを再確認するため、それも含めた解析をする。)

まず、「感情的反応」と「合理的反応」の割合を、性別、年齢層別、学歴別に比較してみよう。その結果を、表 4 に示す。

属性別の回答分布は、a-d のいずれの項目でもほぼ同様の傾向を示している。先述の林らの 1976 年頃の調査では、同じように超自然的なものに興味を示すといっても、どちらかというところ、若年層は a と b のように近代的なもの、高年齢層は c と d のように伝統的なものに対してという傾向を確認している(林 編, 1979a, pp.108-110)。しかし、それから 30 年ほど経た 2010 年の筆者らの日本調査では、そのような差は認められない。先にも述べたような戦前生まれの人々(コホート)との対比で表われた若者と高齢者の興味を示し方の違いは、今ではなくなったのかもしれない。

しかし詳細にみると、質問別では「d. 幽霊や亡霊、人のたたり」に対する感情的反応の割合が最も高く全体で 7 割ほど、「c. 妖怪や鬼」に対する割合が最も低く全体で 5 割程度である。男女別では a と b であまり差は大きくないが、c と d では女性の方が若干感情的反応の割合が多い。特に「d. 幽霊や亡霊、人のたたり」については女性における割合が明確に多く、男性の 6 割強に対して女性は 8 割弱である。年齢層では若年層の方が感情的反応の割合が多い。若年層と高年

年齢層とでは 20～30%ポイント程度もの差が見られた。学歴別では、学歴の高い方が感情的反応の割合が多く、低学歴層とは 20%～30%ポイント近くの差が見られた。本節では「感情的反応」の率の方を眺めたが、むしろ、医療問題のように「合理的反応」を与える人々の方に注目すべき場合もある(林, 1996)。

#### 4. 「意識の基底構造」の国際比較

一般に、人々の意識の国際比較調査では翻訳の問題、各国で異なるサンプリング方法の差違の回答分布への影響などが避けられず、調査データの国際比較可能性は決して自明なこととは言えない(吉野 他, 2010)。特に、本稿で扱っているお化け調査項目、死生観などについては、あまりにも多様な宗教や精霊信仰に関わり、表面上の翻訳等価性などを超えた、奥深い文化的な相違を考慮に入れた翻訳可能性の課題はあまりにも大きい。この点について、吉野は「環太平洋価値観調査」(2004-2009)の日本調査 2004B(吉野 編, 2005c)ではこのテーマについて調査遂行したものの、国際比較調査を直ちに展開することは思いとどまった。「環太平洋価値観調査」に続く、現行の「アジア・太平洋価値観国際比較調査」におけるデータ収集と本稿におけるデータ解析も、この大問題をひとまずおいた試行錯誤と考えざるを得ない。しかし、林 編(1979a)を先行研究として、国際比較の枠組み中で試行する一歩を踏み出すことの意義を念頭に、日本、米国、北京、上海、台湾の国・地域ごとに回答分布データを素朴に概観してみよう。

##### 4.1 「素朴な宗教的感情」

表5では問33について、各国・地域別の結果を示す。問33の各項目 a, b, c の回答分布の比較では、いずれの国のいずれの項目 a, b, c でも、ほとんどの場合、程度の差こそあれ男性よりも女性の方が肯定的回答の率が高い。日本と米国と台湾のパターンは似ており、他方で上海と北京も似ている。総じて前者は肯定的回答の率が高く、後者は低い。全体の中で、台湾が肯定的回答の率が最も高く、北京が低いのが目立つ。項目 b で北京の高年齢層の率が 16%となっているのを除き、いずれの国や地域のいずれの属性(性、年齢、学歴)でも少なくとも肯定的回答の率が少なくとも 2 割以上、国・地域や項目や属性によっては 9 割強となっており、全体として、これらの項目について「存在」を信じる人々の割合は決して少なくない。

項目ごとでは、「a. 神や仏」については米国、台湾において肯定的回答の割合が 9 割強でかなり高く、それに準じて日本でも 8 割ほどが肯定的である。それらに比べれば、北京と上海では肯定的回答の率は低く見えるが、それでもそれぞれ 4, 5 割はある。肯定的回答の率を男女別、年齢層別、学歴別で見っていくと、米国と台湾では各属性のそれぞれで顕著な違いは表われていないが、北京では男性よりも女性の方が 1 割程多く、年齢層別では、若年層が最も高く、中年層、高年齢層と続き、年齢層の上の方が「神や仏」を肯定する人が少ない。学歴については、低、中、高の順で、高学歴の層ほど多い。一方、上海における男女別の肯定的回答の率は、男性よりも女性の方が明確に高い。年齢層別の肯定的回答の率は北京と同様に、若い年齢層の方が高い傾向である。しかし、北京とは異なり、上海では学歴別による差はあまり見られない。

次に、「b. 死後の世界」については、米国と台湾は肯定的回答の率は 8 割を超えており、日本も 7 割あるが、それと比べれば上海と北京は割合が少なくみえるものの、それでもそれぞれ 5 割弱、3 割弱ある。国ごとに男女別、年齢層別、学歴別の差を見ていくと、米国ではいずれにおいてもあまり差は見られない。台湾でも性別、学歴別での差はあまり見られないが、年齢層別の間では高い年齢層ほど若干下がるものの、いずれも肯定的回答の率が高い。すべての項目でそうなのだが、特にこの項目で北京がすべての属性で、他の国や地域よりも明確に低いのが目立つ。北京における肯定的回答は、男性よりも女性の方の率が高く、年齢層別では若年層が

表 5. 各国・地域別の「素朴な宗教的感情」に関連する問 33 への肯定的回答率(%). ※肯定的回答率は、「存在する」あるいは「存在するかもしれない」の回答を合わせた率.

## a. 神や仏

	全体	男性	女性	若年層	中年層	高年齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	81	72	89	81	85	79	80	83	79
米国	95	93	97	93	97	96	96	96	94
北京	41	37	46	51	40	31	35	39	49
上海	56	49	65	65	57	50	57	54	57
台湾	94	92	97	94	94	94	95	95	93

## b. 死後の世界

	全体	男性	女性	若年層	中年層	高年齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	70	62	77	78	82	62	56	70	73
米国	85	84	86	84	87	84	81	87	83
北京	28	24	34	37	30	16	21	25	38
上海	45	43	47	53	46	38	43	39	51
台湾	88	85	91	91	89	84	84	90	89

## c. 霊魂(たましい)

	全体	男性	女性	若年層	中年層	高年齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	81	72	89	89	87	75	76	82	81
米国	94	94	94	94	94	93	93	95	91
北京	38	35	42	46	42	26	31	34	49
上海	50	45	56	62	52	42	48	45	57
台湾	91	90	93	93	92	89	89	93	91

最も高く、年齢が高い方が低い。学歴別では高学歴が最も高く、学歴の中と低は同程度である。(それでも、最小の数字が高年齢層で 16%あるというのは、現在の中国の政治都市の国家の形態と長い歴史や儒教などの文化的背景との関係について深い考察へつながる可能性を示唆しているのではあるまいか。)

上海では、男女別の差はあまり見られないが、年齢層別では若年層が最も高く、中年層、高年齢層の順で低く、北京と同様の傾向を示す。学歴別では学歴が高い方が肯定的回答の割合も高い。

「c. 霊魂(たましい)」については、米国と台湾はいずれも 9 割以上の高い肯定的回答であり、日本も 8 割ほどである。これに対し、北京は 4 割弱、上海は 5 割ほどである。男女別、年齢層別、学歴別を見ていくと、いずれにおいても米国と台湾では大きな差は見られない。北京では肯定的回答の率が男性よりも女性の方が多少高く、年齢層別では若年層と中年層がほぼ同様だが高年齢層はそれらよりも低い。学歴別では低、中、高の順に学歴が高い方が肯定的回答の割

表 6. 信仰の有無(問 44a)別の問 33 への肯定的回答の率(%). ※肯定的回答の率は「存在する」あるいは「存在するかもしれない」の回答を合わせた率.

		問33a 神や仏はいるか		問33b 死後の世界はあるか		問33c 霊魂(たましい)はあるか	
		存在する	存在しない	存在する	存在しない	存在する	存在しない
日本	信仰を持つ人	90	10	73	27	84	16
	信仰を持たない人	79	21	67	33	80	20
米国	信仰を持つ人	99	1	88	12	97	3
	信仰を持たない人	82	18	77	23	86	14
北京	信仰を持つ人	74	26	54	46	73	27
	信仰を持たない人	40	60	26	74	35	65
上海	信仰を持つ人	86	14	70	30	72	28
	信仰を持たない人	45	55	35	65	43	57
台湾	信仰を持つ人	97	3	90	10	93	7
	信仰を持たない人	86	14	81	19	88	13

合が高い。一方、上海でも男性よりも女性の方が高く、年齢層別では高、中、若がそれぞれ4割、5割、6割ほどで年齢が若い層が肯定的回答が高い。学歴別では、低と中がほぼ同じくらいで、高学歴層はそれらよりも高い。

ここまで各国・地域別の「素朴な宗教的感情」に関連する問 33 の回答データについて概観してきたが、これは各個人の宗教や信仰の有無(問 44a)とも密接に関連するに違いない。ここでは、各国・地域別に各個人の宗教・信仰の有無と問 33 の回答のクロス表(表 6)も参考に示しておこう。

いずれの国・地域においても、信仰を持つ人々は問 33 に挙げられる「神や仏」「死後の世界」「霊魂」などの存在に肯定的な回答が、信仰を持たない人と比べ明らかに多い。特に、信仰を持つ人が過半数を超える米国や台湾においては、信仰を持たない人も肯定的回答の率が高い。一方で信仰を持つ人が1割～3割の北京と上海では、信仰を持たない人の肯定的回答は4割程度に留まる。どの国や地域とも異なる回答分布を示したのが日本であり、信仰を持つ人は全体の3割未満であるにも関わらず、肯定的回答は信仰を持つ人も持たない人も高く、過半数を超える。

日本を含め各国では、宗教団体の起こす事件がしばしばある中で、既成の宗教団体への不信感が募る傾向がある(吉野, 2005b, p.152; Yoshino, 2009)。一方で、特定の宗教に結び付いているとは限らない「素朴な宗教的感情」の一側面が、ここで扱ったような意識調査のデータに浮かんでいるかと思われる。ただし、各国や地域の「素朴な宗教的感情」は、おそらく既成の宗教とも絡み、複雑であろうから、その深い解析は今後の大きな課題であろう。

なお、参考までに、既成の各宗教での「死後の世界」の教えについては、以下にまとめておこう(武光, 2009)。ただし各宗教でも、宗派によってのヴァリエーションはあるし、同じ宗教(例えば、カトリックやイスラム教)でも、内実は各国で本質的な差異もあり得るので注意すべきであろう。

「神仏、死後の世界、霊魂の存在を信じるか」に関する各宗教での教えの違い

- **イスラム教** 五行六信の1つとして来世を信じる
- **佛教** 上座部仏教 来世で生まれ変わる。善行を積むとよい境遇に生まれ変わる(浄土は飽くまでも仏だけの世界)

- 大乘仏教 仏を拜むものは仏の慈悲で浄土へ行ける(浄土へ行ければこの世に生まれ変わり苦しむことはない)
- 道教 死後の裁きといった発想はなく、死んでも魂は鬼(き)として永遠に生きる中国人は死後は考えずに、福祿寿(子宝、金持ち、長生き)の様な現世利益を求める  
老子から荘子へ死生を超越して宗教的解脱に至る
- バラモン教(インド) 天界楽土で祖霊たちと再会し、時が来れば再びこの世に生まれてくる。行いが悪いと昆虫や小動物にされる。祖先の靈魂が小動物に宿ると思うので、殺傷は大罪とする輪廻転生、業(前世の行い)
- ヒンズー教 地獄の存在を認めていない。解脱は、輪廻転生や業からの解放

#### 4.2 死生観

問 39 の死生観に関する各項目は、国際比較の準備段階でも、文化を越えた翻訳の可否が特に大きな問題となった。それ自体が、各国の人々の宗教や死生観の差違と深くかわり、表面上の数字の大小比較だけでは適切な解析はできまい。例えば、項目「h. 親子心中」については中国本土で調査監督をした男性たちの個人的意見としては考え難いという。儒教文化では男子を生き家系を継がせていくことが肝要とされ、仮に自殺したいのであれば、子供は親戚などに預け、一人で死ぬべきだという意見であった。他方で、台湾では、調査会社との打ち合わせにおいて担当が女性たちであったためか、台湾が中国本土とは異なるためか、日本人同様にその気持ちは分かるという意見であった。このように、文章としては同じ質問であっても、各文化や社会状況のなかで、また性別、年齢層別など各属性の人々で捉え方が異なるものであり、データの解釈以前に、質問の仕方が大きな問題であることが幾度も再認識されている。しかし、これを念頭に置くことを前提で、表 7 を眺めると多様な思いが浮かぶであろう。

ここでは回答パターンの傾向を概観してみると、これまで見てきた結果とは傾向が異なり、問 33(表 5)のデータで見られたような日本・米国・台湾と北京・上海とがグループ分けするような傾向は、いずれの項目においてもあまり見られない(表 7)。

まず「a. 大きな見えない力」については、肯定的回答は台湾が最も高く 6 割強で、続いて日本、北京、上海が 5 割ほど、米国は 3 割半ばで最も低い。肯定的回答がアジアでは全般的に多く、米国ではアジアの国のどの属性よりも少ない。

次の「b. 運命論」についての結果も a の回答とよく似た傾向を示しており、台湾が最も肯定的割合が高く、最も低いのは米国である。北京と上海の肯定的割合が高いことから、4.1 節で論じた「素朴な宗教的感情」とは多少とも異なる何らかの文化的背景によって、西洋と東洋で回答パターンの違いが浮き上がったのかと推察される。台湾を除き、概ね、女性の方、高齢層の方が肯定的回答の率が高い。学歴については、米国、北京、上海を除くと、低学歴の方が肯定的回答の率が高い。一般にどの国も学歴は年齢に逆相関する傾向が高いのだが、それを念頭に置くと、この項目のデータで各国や地域別にみて、年齢との相関と学歴との相関が必ずしも同じ傾向でない場合、その理由を追及する価値はありそうである。

また「c. 生まれかわり」については、台湾のみが他の国や地域より肯定的回答が顕著に多く 5 割半ばである。日本がそれに続き 3 割半ばであるが、他は米国と上海が 2 割弱、北京 1 割強とかなりの差がある。また、どの国においても女性の方が、肯定的回答が多いことが確認できる。

「d. 自然の一部」についても台湾のみ肯定的回答が他国や地域より高く 5 割ほどあるが、他は約 2 割程度である。どの国や地域においても若年層の肯定的割合が高い。「e. 人類全体の進歩と幸福」については、いずれの国や地域でも肯定的回答が過半数を占めている。「f. 自己犠牲」については日本、米国、北京で肯定的回答が 6 割を超えているが、上海、台湾は 4 割程度であり、他の項目では見られなかった傾向が表れている。この結果だけで簡単に解釈するのは慎重

表 7. 各国・地域別の死生観に関する問 39 への肯定的回答の率(%)。

a. 自分はなにか大きな見えない力によって「生かされている」という実感がある									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	50	45	55	45	56	50	40	48	55
米国	35	34	36	26	41	38	34	35	34
北京	50	46	55	46	52	54	49	56	48
上海	50	51	49	55	49	47	45	55	51
台湾	65	66	64	64	64	68	69	66	61
b. ある人が、どこで生まれ、いつ死ぬかは、その人の運命によって決まっており、人の力では変えられない									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	59	50	67	51	49	66	73	61	52
米国	42	37	47	34	47	47	41	44	39
北京	61	60	62	50	67	68	67	63	54
上海	52	50	54	43	57	54	49	60	48
台湾	70	71	69	71	63	75	77	70	66
c. 人は死んでも、繰り返し生まれ変わるものだ									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	35	25	44	45	47	26	29	33	38
米国	19	15	23	21	21	16	19	23	11
北京	13	8	19	15	16	9	15	10	15
上海	18	15	22	23	18	15	15	21	19
台湾	56	51	61	60	54	54	53	57	56
d. 自分が死んでも、自然の一部になって生き続けることができる									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	31	26	35	37	32	28	33	30	31
米国	29	27	31	34	30	23	26	30	26
北京	25	25	26	32	24	19	20	19	35
上海	26	27	24	33	25	21	26	26	25
台湾	49	49	48	54	45	48	46	52	48
e. 人類全体の進歩と幸福のために、自分でできることをやってみよう									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	76	72	79	70	80	76	67	76	78
米国	72	68	75	74	72	70	74	73	67
北京	91	92	90	88	90	95	91	91	90
上海	79	79	79	81	82	75	66	85	85
台湾	83	84	82	86	80	83	78	85	84
f. 自分を犠牲にしても、その人のために尽くしたいと思ったことがある									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	64	64	64	67	69	60	62	61	67
米国	68	65	71	72	69	64	68	68	68
北京	66	67	65	63	67	70	69	65	65
上海	48	52	43	47	50	46	37	54	52
台湾	43	46	40	50	38	41	41	41	47
g. 自分の主義主張のために死ぬことは、立派なことだ									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	22	31	14	27	19	22	21	17	29
米国	53	59	49	56	57	49	47	54	56
北京	44	47	40	35	42	57	47	50	37
上海	28	30	25	24	32	28	21	37	27
台湾	20	23	17	25	17	18	17	20	22
h. 自殺するとき、自分の子供を道連れにする人の気持ちは、よくわかる									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	9	8	10	7	4	12	23	8	7
米国	7	6	7	4	8	9	13	5	7
北京	12	10	13	13	11	10	10	13	12
上海	11	10	11	15	10	8	8	11	12
台湾	17	14	20	18	19	15	14	16	21
i. 恋する者どうしが心中する、ということは美しい									
	全体	男性	女性	若年層	中年層	高齢層	学歴低	学歴中	学歴高
日本	5	5	5	5	2	6	10	4	5
米国	3	4	2	2	3	3	7	2	1
北京	6	6	5	7	5	5	6	6	5
上海	7	7	6	8	8	5	7	8	6
台湾	2	3	2	3	2	2	3	3	1

でなければならぬが、敢えて日本、米国、北京の共通性を考えると、世界の経済、政治、文化などで他国を牽引するリーダーであろうとする意識が強い国や地域だということであろうか。

「g. 主義主張」について、他の項目とは明確に異なるのは、どの国や地域でも概ね、男性の方が女性よりも肯定的回答が多い傾向がみられる。米国は 5 割を超える肯定的回答を示している。北京も肯定的割合の率が高いが、北京は上海よりも肯定的回答の率が高いのは、政治の中心都市と経済の都市の役割分担と関係している部分があるのかもしれない。日本、上海、台湾の肯定的回答はいずれも 2 割程度である。

「h. 親子心中」と「i. 恋人心中」の自殺に関する項目では、いずれの国や地域の肯定的回答も、a から i までのすべての項目の中で著しく低い、「i. 恋人心中」の方が、全体として最も低い様相である。「h. 親子心中」については、台湾は若干他の国や地域よりも肯定的回答の率が高いものの、それでも 17% である。台湾が比較的高い結果は、親子の絆を重視する儒教の影響を考慮すべきかと推測する。(なお、「h. 親子心中」の解釈について北京・上海と台湾での調査監督者の意見を前述したが、台湾は予想通りだが、北京と上海では、わずかにせよ、むしろ日本よりも肯定的回答の率が高く出ていて、意外であった。中国の男性インテリと一般人との差違か。)

#### 4.3 超能力や妖怪などに対する興味の国際比較

まずは問 26 の超能力や妖怪などに関する 4 つの項目に対して、回答者の「感情的反応」の割合の合計を、国や地域ごとに比較してみよう。

林らの先行研究に倣い、選択肢の「1. つまらない」または「7. いない・ない・ばかばかしい」を選んだ人を「合理的反応」とし、選択肢「2. いてほしい・あってほしい」、「3. いる・ある」、「4. こわい・おそろしい」、「5. いてほしくない・あってほしくない」、「6. たのしい・おもしろい」の 5 つのいずれかを選んだものを「感情的反応」としよう。各国や地域における「感情的反応」と「合理的反応」の回答割合を表 8 に示す。

本研究では、これらの 4 項目について、林 編(1979a)や林・鮑戸(1976)らの先行研究が示唆するように、a と b を「近代的なもの」、c と d を「伝統的なもの」と分けて考えることにする。まず、「a. 超能力・念力」については古くは「神通力」といったものもあり、近代的な全く新しいものとは思われないかもしれない。しかし、現代において人々がもつ「超能力」という概念は、例えば 1889 年にドイツの心理学者マックス・テソワールが生み出した「超心理学」の提唱により 1900 年代前半に発展した一連の超能力研究によって欧米を中心に広まったと言われる。その後、マスメディアの影響などもあり、日本でもブームをよびおこした時代が幾度かあり、そのような意味での時代時代の流行の波にのったものという程度の意味では近代的なものといえよう。

まず、各国や地域の回答分布を項目別に比較すると、a および b についてはいずれの国や地域でも約半数かそれ以上が感情的反応を示したのに対し、c および d については半数以上が感情的反応を示す国と、3 割程度しか感情的反応を示さない国とがある。

さらに国や地域別に感情的反応の割合を詳細に観る。「a. 超能力や念力」の項目については、北京と上海は約 5 割であり、他の国や地域は全て 6 割を超えており、全体として高い感情的反応を示している。もともと中国共産党の科学的社会主義の樹立の旗頭の下で、この 10 年以上にわたる中国共産党の国家目標に、政府、軍、民間の近代科学体制化が唱えられているためか、中国は科学に関する信頼を肯定する回答の率が 9 割以上であり、通常の意識調査の回答分布としては異常に高いことを報告してきた(Yoshino, 2006, 2009, 2013)。

さらに「b. 空飛ぶ円盤や宇宙人」についても、北京、上海が若干低いものの、他の全ての国と地域で過半数の人々が感情的反応を示している。この「a. 超能力や念力」と「b. 空飛ぶ円盤や宇宙人」については、いわゆる SF 文学や映画、ドラマなどの影響に加え、超能力者と言われる人々や空飛ぶ円盤、いわゆる UFO の目撃情報が度々各国のメディアでエンターテインメント性を



表 8. 各国・地域別の超能力や妖怪などに対する興味に関する問 26 の感情的反応と合理的反応の割合(%)。

a.超能力や念力				
	感情的反応についての 回答割合の合計	順位	合理的反応についての 回答割合の合計	順位
日本	66	2	34	3
米国	64	3	27	5
北京	50	5	50	1
上海	51	4	49	2
台湾	69	1	31	4
b.空飛ぶ円盤や宇宙人				
	感情的反応についての 回答割合の合計	順位	合理的反応についての 回答割合の合計	順位
日本	66	1	34	5
米国	60	3	40	3
北京	52	5	48	1
上海	57	4	43	2
台湾	64	2	36	4
c.妖怪(ようかい)や鬼				
	感情的反応についての 回答割合の合計	順位	合理的反応についての 回答割合の合計	順位
日本	58	2	42	4
米国	28	5	72	1
北京	29	4	71	2
上海	38	3	62	3
台湾	73	1	27	5
d.幽霊や亡霊、人のたたり				
	感情的反応についての 回答割合の合計	順位	合理的反応についての 回答割合の合計	順位
日本	70	2	30	4
米国	61	3	39	3
北京	31	5	69	1
上海	42	4	58	2
台湾	73	1	27	5

持って取り上げられている。完全に信じきれぬわけではないものの否定しきれない、あるいは完全には否定したくはない興味の対象として、テレビの視聴率も低くはない。

一方、「c. 妖怪や鬼について」は、台湾では7割強の高い感情的反応の率が示され、日本では約5割、上海では約3割、米国と北京では3割を切っている。台湾は、中国の古来の民間信仰が今も色濃く残る文化を持つ側面がある。妖怪や鬼といった存在は中国の古い民話でも度々登

場するテーマであり、台湾の人々にとって馴染みのある存在と考えられる。日本にも古くから妖怪や鬼にまつわる伝承が存在しており、現代でも子どもの頃から絵本などで親しまれ続けている。映画や漫画などでその存在に触れる機会も多い。

こういった回答分布のパターンは、直接にせよ間接にせよ、「素朴な宗教的感情」や「科学観」にも関係するのかもしれない。その考察には、「近代科学」が欧州のキリスト文化圏の中でのカルトや宗教改革と密接に結び付き誕生してきた一種の葛藤の歴史や、日本における「和魂洋才」、中国における「中体西用」など東洋における近代科学の受容過程での葛藤、現在中国における政治思想など、深い知見と考察が必要であろうが、残念ながら本稿の範囲をはるかに超える。他方で、妖怪(goblin)や鬼(ogre)などの各文化における翻訳という国際比較上の大問題にも関わっている可能性も大きく、皮相的な数字の大小比較はあまり意味を持たないのかもしれない。

吉野(2008)では、「東アジア価値観調査(2002-2005)」のデータをもとに、これらの4項目すべての「感情派(非合理派)」の割合の合計を国や地域ごとに比較し、1. 台湾、2. 日本、3. 香港、4. 韓国、5. アメリカ、6. 北京、7. 上海の順を確認している。本研究の結果と吉野(2008)を比較すると、東アジア諸国における「感情的反応」の率の順位は変化がなく、上位を占める感情的反応の多い国と、合理的反応の多い国が少なくともこの10年は固定しているのが確認される。そのような国々の様相は、はたしてこの10年程度の傾向だけであるのか、あるいは遥かに長い時代のスパンでも普遍的なものであるのか、今後も考察が必要に思われる。

#### 4.4 多次元データ解析

##### 4.4.1 問 33 に関する分析

1970年代後半ごろは欧米の計量心理学を中心に「多次元尺度解析法(MDS)」が発展し、日本でもMDS研究会が発足し、その流れの中で「お化け調査」が推進され multidimensional scaling (MDS) や multidimensional analysis (MDA) が多用されている(林・鮑戸 編, 1976; 林 編, 1979a; 林 編, 1984)。他方で、これらを含む多変量解析(多変数解析とも呼ばれる)も同時期より大きく発展してきた。林知己夫は、お化け調査を含めた広範な研究において、自身の開発した数量化理論を発展させた解析を総合して、多次元データ解析と称している(林, 1974)。

これは、数学的には同じ手法である多変量解析や多変数解析とは一線を画し、あくまでも実証データの解析を志向し、戦前の「統計数理」の登場から始まり、「数量化」、「行動計量学」、「調査の科学」を経て、「データの科学」に至る一連の林知己夫の統計哲学と密接に関係している(林, 2001; 吉野, 2001; 吉野 他, 2010)。

特に、先行する「お化け調査」研究の文脈の中では、多様な次元が複雑に絡むであろう、人々の「意識の基底構造」(林 編, 1984)を探るために数量化 III 類が活用されている。本稿でも、それに倣い、国際比較データの解析を試みる。ただし、先行研究のように多様な項目に数量化理論を適用し直ちに人々の「意識の基底構造」に迫るというよりは、ここでは、まず、各国のデータの様相を概観する手段としての活用にとどまらざるをえないことに留意する。しかし、それでもその過程で、「意識の基底構造」を国際比較する尺度構成が容易ならざる実態が浮かんでこよう。

##### 各国や地域の概観

まず、各国や地域別に、数量化 III 類を問 33 に適用した結果を概観する(図 4)。ただし、ここでは年齢層については 10 歳刻みで試行した。よって、性別と年齢層別については性別の年齢層 6 区分とし、合計 12 区分の「性別・年齢層別」として扱った。

また具体的に属性変数の分析へ投入するにあたっては、目的項目である問 33, 39, 26 に対して、それぞれの属性をアイテム-カテゴリ型の変数として同時に数量化 III 類に投入して、カテ

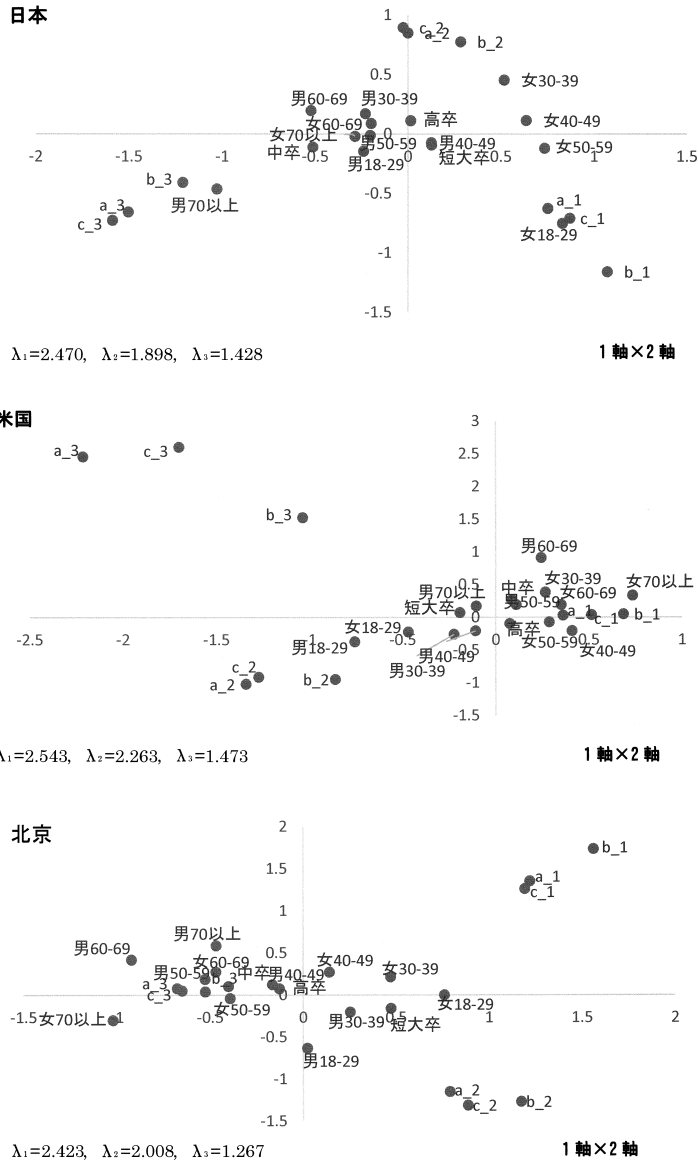


図 4. 各国・地域別の Q33 と性別・年齢層別(クロス)と学歴別の関係(数量化 III 類).

ゴリスコアをプロットしている。その結果、日本を含め、どの国や地域でも、1軸、2軸それぞれにおいて、どの項目 a, b, c でも選択肢 1, 2, 3 の相対的な座標はそれぞれがほぼ同一で各選択肢が番号ごとにクラスターを成し、そのクラスターが 1 軸と 2 軸で(逆)U 字型を成している。性別・年齢層別や学歴との関係は、日本では、女性は「1. ある・存在する」や「2. あるかもしれない」に近く、男 70 代以上は、いずれの項目に対しても、「3. ない・存在しない」に近く位置する。

米国では 1 軸と 2 軸において、性別・年齢層や学歴との関係は、日本ほどはあまり明瞭に見

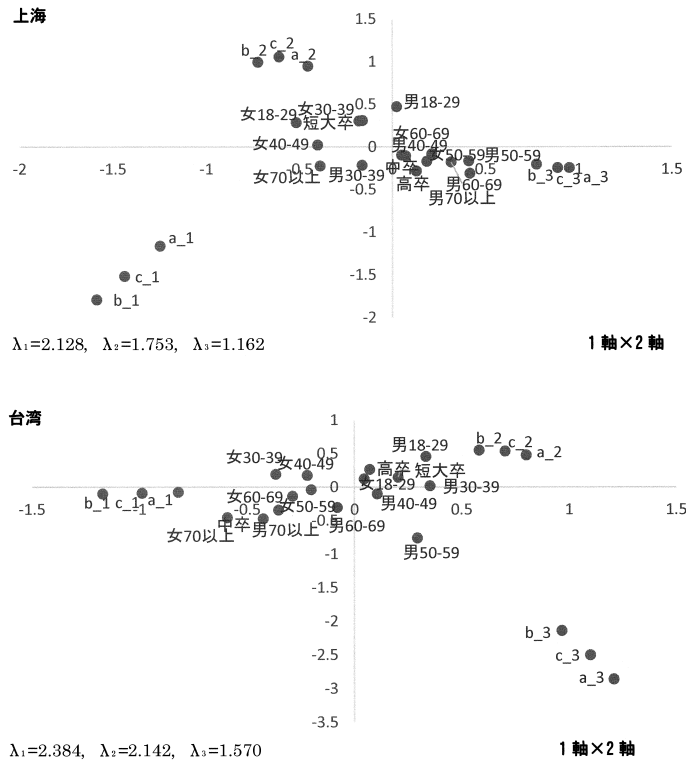


図 4. (つづき)

られない。これは、このテーマに関しては、そのような外的属性を越えた態度が表われていることが示唆される。各次元の固有値の相対的値を考えて、ここでは図示していないが、敢えて 3 軸まで見ると「若年層、高学歴層」と「高齢層、低学歴層」の位置が対比されている。米国では、比較的、カトリックは若年の高学歴層に多く、欧州ではプロテスタントに若年の高学歴層が多いと言われる(ただし、国による差は少なくあるまい)が、この宗教とこのテーマに関する回答についても、国による事情が複雑で容易ならざるものであろうが、さらに深く考察すべきことが示唆される。

北京は、男女とも高齢層が「3. ない・存在しない」に近い。上海では年齢層間の違いはあまりなさそうであるが、女性の方が「1. ある・存在する」および「2. あるかもしれない」に近く位置しているが、男性は「3. ない・存在しない」に近い。

台湾は年齢層間の違いはあまりなさそうだが、女性の方が「1. ある・存在する」に近く、男性は「2. あるかもしれない」に近い。また、「3. ない・存在しない」については、弱い連関だが、男性の方がそのような傾向がありそうである。(この結果を見ると、3.1 節では選択肢の 1 と 2 を統合した肯定的回答分布を見たが、解析の目的によっては、これらの選択肢ももとのままにした方がよい場合もあろうか。)

#### 4.4.2 問 39 に関する分析

死生観に関する問 39 の項目について、目的項目群と属性変数を同時に投入した数量化 III 類の結果を図 5 に示す。どこの国や地域でも、1 軸に沿って選択肢の「3. どちらともいえない」と

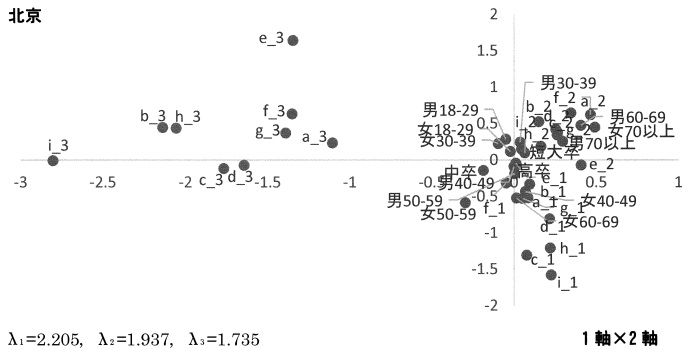
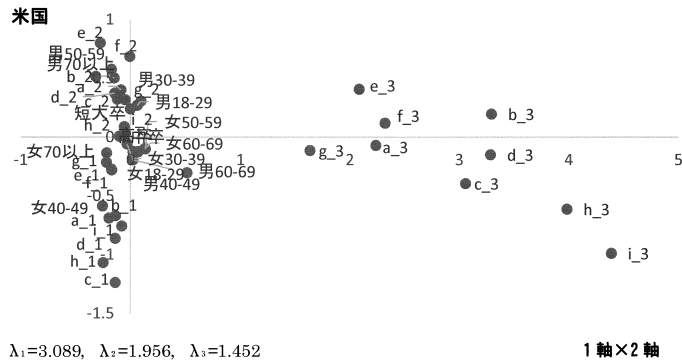
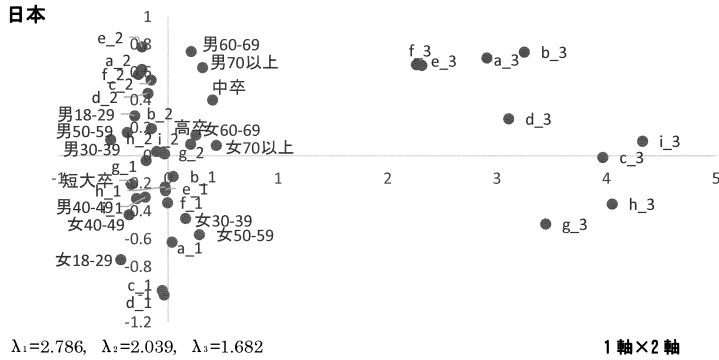


図 5. 各国・地域別の Q39 と性別・年齢層別(クロス)と学歴別の関係(数量化 III 類)

「1. そう思う」「2. そうは思わない」が明瞭に分離しており(日本では図の左右), さらに第 2 軸に沿って「1」と「2」が分かれ(日本では図の左半分の上下), a, b, c の 3 項目の各選択肢は番号ごとにクラスターを成している。ここで, 「3. どちらともいえない」は提示カードの選択肢としては明示されておらず, 回答者が自発的に「どちらともいえない」と言った場合のカテゴリーであり, 現実に対応する回答者は 4%前後に過ぎないので, 数量化の結果として安定した位置にはない可能性に留意する。

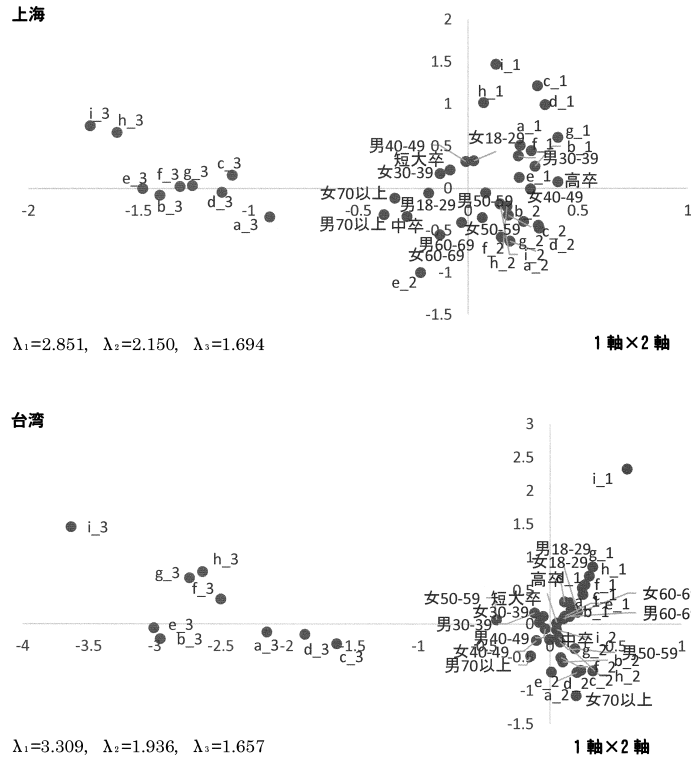


図 5. (つづき)

性別、年齢層別、学歴別に関して眺めると、日本では年齢層間の差があまり見られず、死生観の各項目に対して女性の方が肯定的回答に、男性の方は否定的回答に近い。学歴の効果については、年齢層の効果と重なっているようだが、それ以外の特徴は明瞭ではない。(先述したが、一般に、どこの国でも学歴と年齢層自体が逆相関していることが多いことに留意する。)

米国でも日本と類似した傾向がみられる。一方で、北京は男女差がなく、混在している。上海は、低い年齢層が肯定側、高い年齢層が否定側にある。台湾では、性別、年齢層別、学歴層別のいずれにおいても、一貫した傾向が明瞭ではない。

結局、各国や地域の差が大きく、各国や地域それぞれに複雑な様相を示し、当該の外的属性については明確に分離される効果は大きくは見られない。これは、扱っているテーマが、それらの属性を越えた各人のパーソナリティに密接に関連しているという想定とは矛盾はしない。年齢層間の差が見られることもありそうであるが、これは本当に年齢の効果なのか、それともある国のある時代のコホートの効果なのかを弁別するには、長期にわたる時系列的な国際比較データが必要であろう。

#### 4.4.3 問 26 に関する分析

最後に、問 26 のデータに適用した結果を概観してみよう。

##### 各国や地域の特徴：選択肢のクラスター

問 26 について、まず選択肢のクラスターをみて、国や地域別の特徴を探ってみよう(図 6)。各国の様相は次のようにまとめられる。日本では、1 軸に沿って左右に「1. つまらない」とその

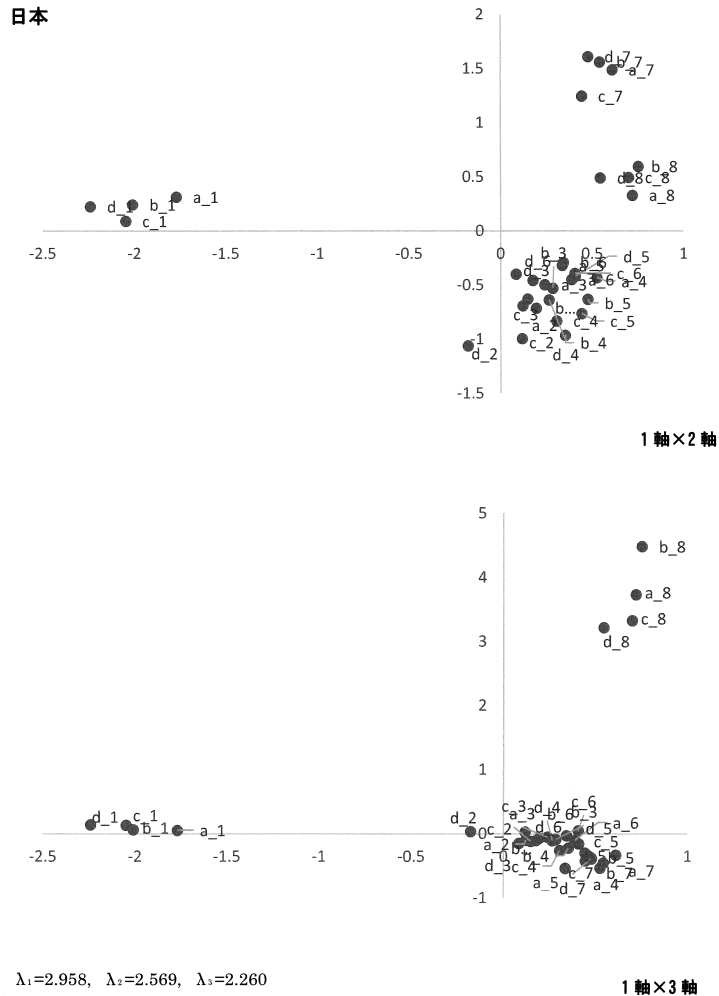


図 6. Q26 の回答データの各国・地域別の数量化 III の適用。

他の選択肢群が大きく分かれ、さらに 2 軸に沿って右半分の下上に「7. ばかばかしい・いない・ない」、 「8. おそろしくない・こわくない」、その他の選択肢「2, 3, 4, 5, 6」の 3 つのクラスターに分かれている。全体として、1 軸と 2 軸のなす平面上で「1」, 「7」, 「8」, その他の「2, 3, 4, 5, 6」が 4 つのクラスターとなっている。ここでの結果に関して言えば、4 つの項目については、近代的なものである a および b と、伝統的なものである c および d には分かれておらず、先述の先行研究の結果は確認されない。(そのような分離を目的とする場合、ここでの形での数量化 III 類の適用は相応しくないというだけの可能性もあるが。)

米国は、1 軸と 2 軸において項目 a, b, c, d の選択肢「1. つまらない」のクラスターと「7. ばかばかしい・いない・ない」のクラスターが両端に位置しているという点は日本と同様である。ただし、日本と比べ、その他の感情的反応の選択肢は、「2」, 「3」, 「6」, 「4」, 「5」, 「8」と分離しているようである。a, b, c, d の 4 項目について、日本と同様、a および b, c および d というようには分かれていない。

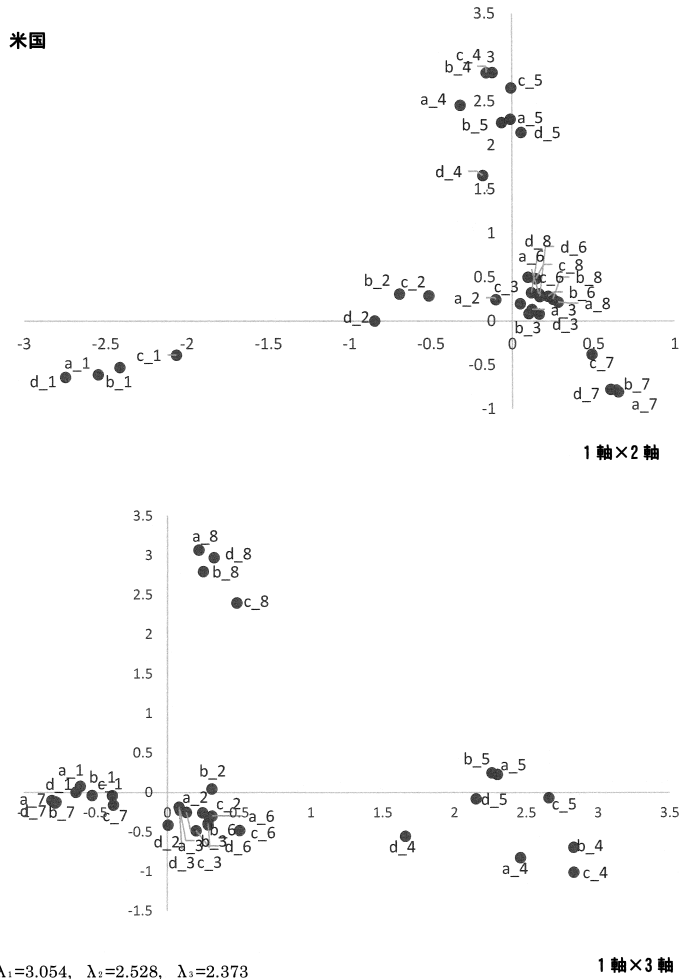


図 6. (つづき)

北京は、1軸と2軸において、「8. おそろしくない・こわくない」とともに感情的反応の「2, 3, 4, 5, 6」が1つのクラスターとして固まっている、「1. つまらない」と「7. ばかばかしい・いない・ない」は、それらからそれぞれに離れている。

上海は北京と類似のパターンで、1軸と2軸において、感情的反応の「2, 3, 4, 5, 6」のクラスターから「1. つまらない」と「7. ばかばかしい・いない・ない」が離れているが、「8. おそろしくない・こわくない」もやや離れている。

台湾は、北京や上海と、「1. つまらない」と「7. ばかばかしい・いない・ない」に関しては、それぞれが離れていることが共通している。しかし、感情的反応の「2, 3, 4, 5, 6」及び「8」の位置関係は、3つの国・地域で異なる。北京は、「3. いる・ある」のみが離れている。上海は、「8」もやや離れている。台湾は、「2, 3」と「4, 5, 6」で分離している。

大局的には、すべての選択肢に関して各国や地域に共通してみられるパターンは、まず、どの国や地域においても、選択肢「1. つまらない」が1軸に沿って、他とは大きく外れるのが目



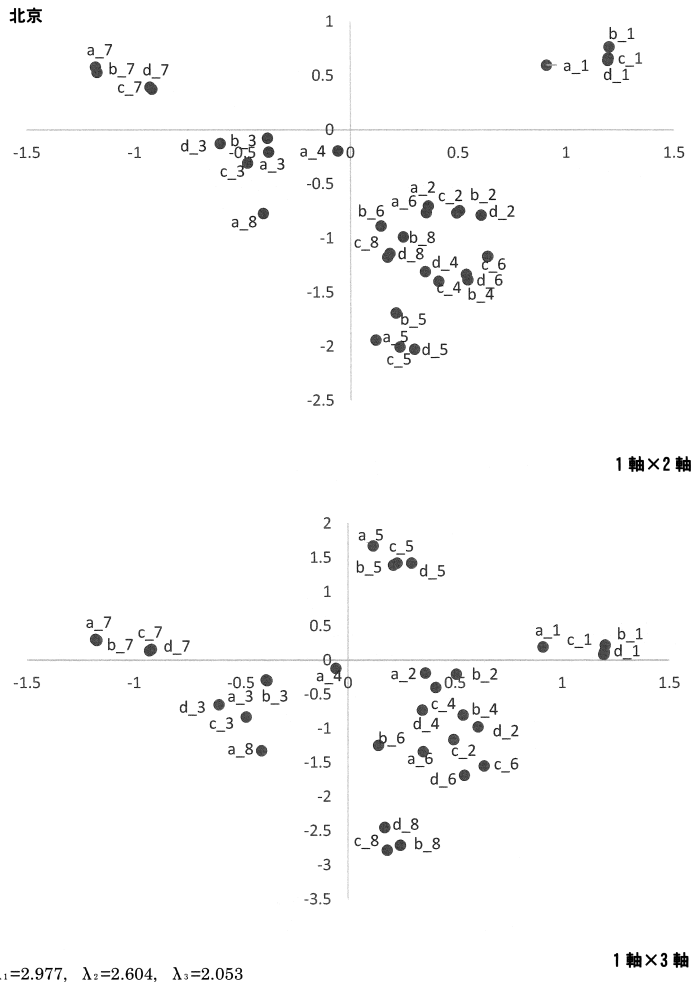


図 6. (つづき)

立つ。次に、選択肢「7. ばかばかしい・いない・ない」が外れる。ただし、それは、国や地域によって、1軸に沿って外れるか、2軸に沿って外れるかの差はある。しかし、いずれにせよ、どの国や地域でも共通して、概ね、選択肢の2, 3, 4, 5, 6および8はクラスターを形成する様相があり、「1. つまらない」と「7. ばかばかしい・いない・ない」は、それとは別に位置し、結局、全体では3つのクラスターとなる。

結局、どの国や地域も、概ね、まず「感情的反応」グループ(選択肢 2, 3, 4, 5, 6 および 8)と「合理的反応」グループ(選択肢 1, 7)に分けられ、さらに「合理的反応」グループ(選択肢 1, 7)を敢えて分ければ、選択肢 1 の無関心のグループと選択肢 7 の否定派のグループとなるようである。

詳細に観ると、まず日本での「合理派の人々 vs 合理派ではない人々」の分離は先行研究の結果が必ずしも完全にはそのまま再現されないようであるものの、概ねの傾向は推察された。林知

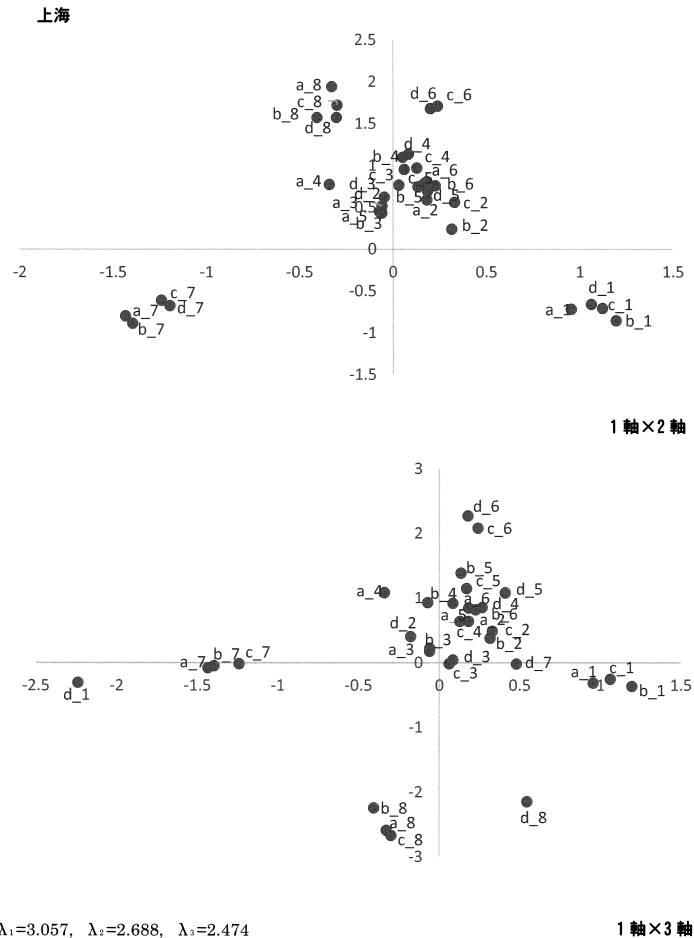


図 6. (つづき)

己夫や林文ら(林 編, 1979a)による合理派の人々とそうではない人々の分類の研究では最終的には外されていた選択肢「8. おそろしくない・こわくない」は、ここでは選択肢 2, 3, 4, 5, 6 と同様のクラスターに属することに留意する。

全体を俯瞰して、概ね、日本以外のすべての国や地域では日本と比べ、各選択肢のクラスターが多少ともばらばらに分布する傾向が見られる。つまり、日本以外の各国や地域の人々にとって、当該の選択肢群によってカバーされ弁別される感情の各次元(側面)は、日本とは必ずしも様相が同じではなさそうなことを示唆している。ただし、それが量的な差違なのか、質的な差違なのかは、直ちに結論付けられまい。パーソナリティの分離の課題はさらに容易ならざること示唆している。

前節の単純集計やクロス集計では、先行研究のように項目「a および b」と「c および d」、いわゆる近代的なものへの関心と伝統的なものへの関心に分離されていなかったが、ここでの数値化 III 類の結果でも、やはり、明確な分離は認められなかった。

しかし、これに関して林文(私信, 2014 年 1 月 8 日)は次のような解析を試みて考察している。選択肢 1-8 を「肯定的な言葉の選択肢 2, 3, 4, 6」と「それ以外の選択肢 1, 5, 7, 8」の 2 つの区分

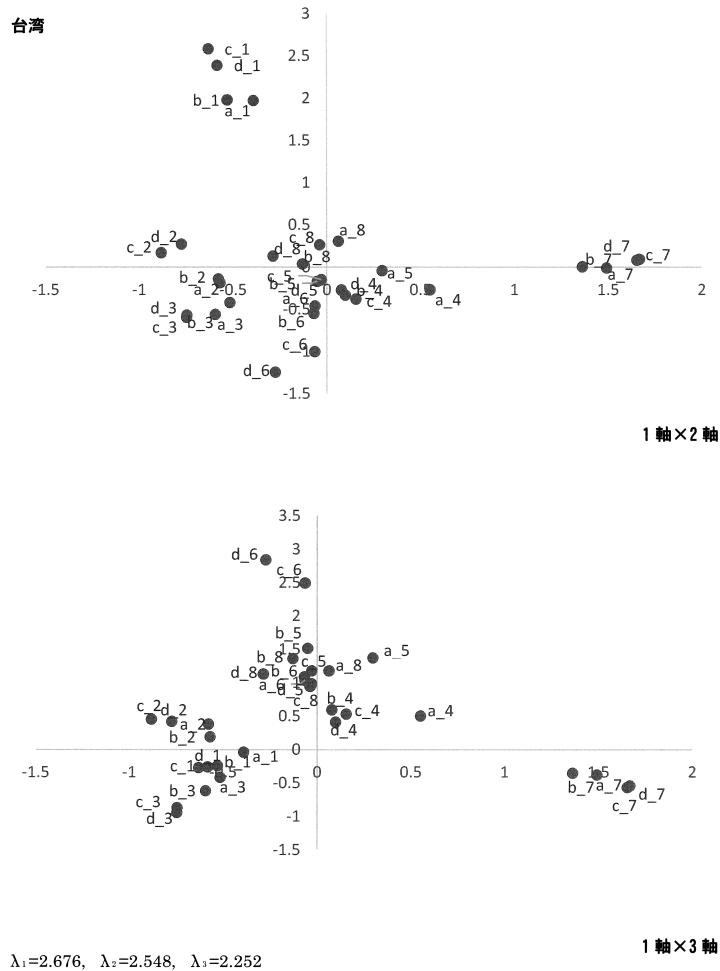


図 6. (つづき)

にした回答データに数量化 III 類を適用すると、1 軸では肯定とそれ以外のグループに分かれ、2 軸では a と b が比較的になくなり、c と d はそのグループからは別に位置するが、それからの距離はほぼ同じくらいの距離となる。これは、a, b, c, d それぞれの項目を、8 選択肢の回答率で 8 次元表示した場合と、各項目間の距離を各次元の座標の差の絶対値の合計で定義した場合では、その項目間の距離の構造を見てもほぼ同様の傾向である。したがって、1 つの示唆として、項目 a, b, c, d の分類は、選択肢 8 語のそのまま回答率のパターンを見るという観点も再検討すべきである。

我々は、林知己夫、林文らの先行研究に基づき、上記のお化け調査項目の選択肢の 2 分類(「合理」対「感情」)をしてきたのであったが、上記の林文の新たな考察を得て、再び、各選択肢の回答分布を詳細に考慮し直すことが必要かもしれない。

#### 各国や地域の特徴：各属性による差異

次に、国や地域別に、目的項目群と属性変数を同時に投入した数量化 III 類の結果について、眺めてみよう(図 7)。

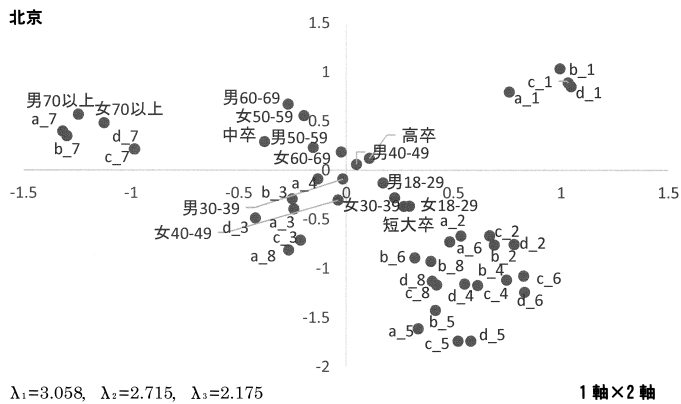
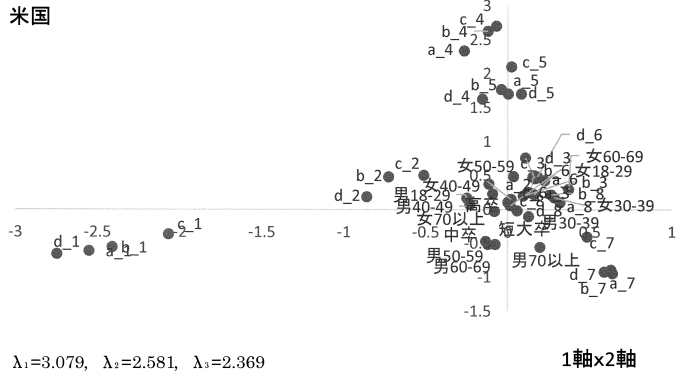
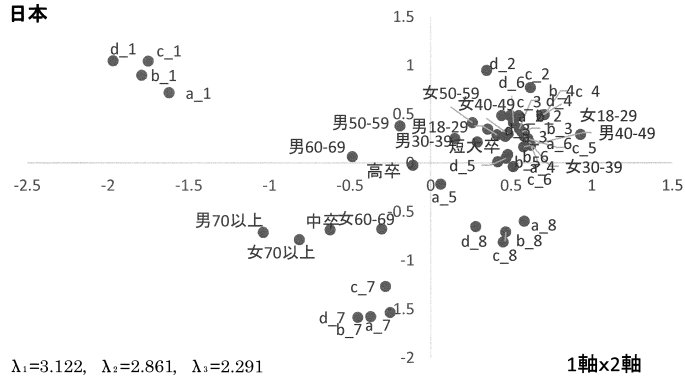


図 7. 各国・地域別の Q26 の性別・年齢層別(クロス)と学歴別の関係(数量化 III 類).

日本では、男女の差はあまり見られないが、1軸と2軸のなす平面上に「1. つまらない」、 「8. おそろしくない・こわくない」、その他の「2, 3, 4, 5, 6」がクラスターを成している。年齢層が高い方が「7. ばかばかしい・いない・ない」に近い。先にも触れたが、現在の日本の高齢層は、その前の世代や後の世代とは著しく異なる価値観を持ち、合理的な態度を見せる世代であると(Yoshino, 2009, 2013)の指摘があるが、ここでもそれが再確認されるようだ。

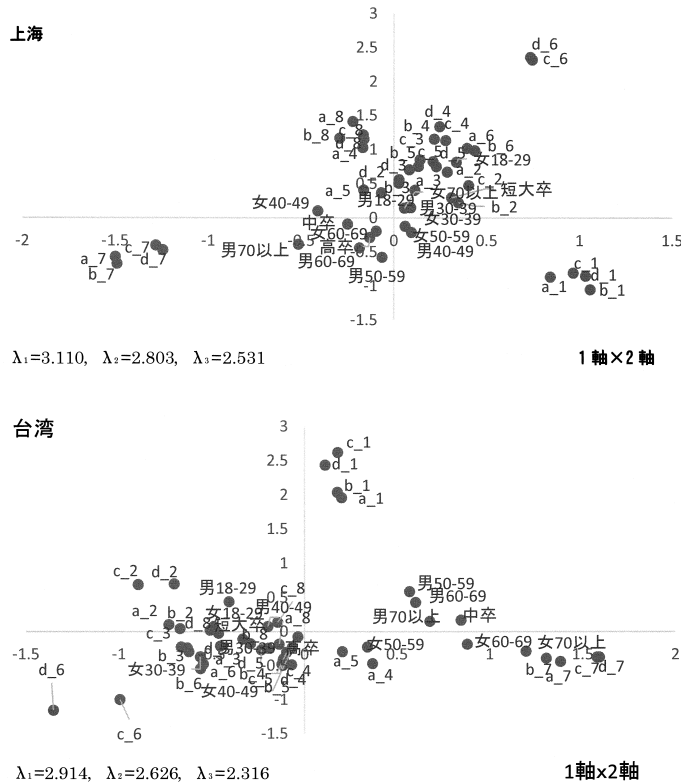


図 7. (つづき)

米国は、性別、年齢層別、学歴層別の間の差違が明瞭ではなく、混在している。これは、米国ではこの種の質問については、一方で、外的属性が同様な人々の間でも意見が異なり、他方で、外的属性は異なるがこの種の態度は同様である人々も多いことを示唆する。これは、外的属性を超えたパーソナリティを特定するためにお化け調査項目を考えるという動機に合致するところである。

北京は、男女問わず70代以上が「7. ばかばかしい・いない・ない」に近く位置する。(これは、文化大革命時の各世代の効果などと関係あるか?) また、「1. つまらない」については、属性の影響がないようである。これも、属性を超えた合理派の存在を示唆する。

上海も、高齢層の男性が「7. ばかばかしい・いない・ない」に近いが、台湾は高齢層の女性が「7. ばかばかしい・いない・ない」に近い。「1. つまらない」はそれらのいずれの選択肢とも離れている。

以上、数量化 III 類を用いて、問 26 のデータを概観してみた。性別、年齢層別、学歴層別などの外的属性について、問 26 の各選択肢との関係は単純な対応は明確ではないが、これは当該の項目がそれらの外的属性を超えたパーソナリティに関連しているであろうということと矛盾しない。しかし、他方で詳細に観ると、当該の項目の選択肢群の分離(数量化 III 類の結果)が定量的にも日本とほぼ同様であるとは言えず、各国固有の複雑な事情が浮かび上がり、単純に林知己夫らの先行研究をそのままの形で国際比較へ敷衍することはできないようである。しかしながら、日本の人々の意識の変化や各国や地域の事情も考慮しながら、国際比較の枠組みの中

でさらに計量的に意識の基底構造を探るため、選択肢の再カテゴリー化の工夫などを含め、幾つかの課題は浮かび上がってきたと思われる。

#### 5. 結びに代えて—国際比較における意識の基底構造の解明へ—

厳しい自然と対峙して生き残りの戦いを繰り返してきた北欧や砂漠地帯に暮らす人々やアメリカ大陸開拓者の自然観と、自然の恵みの中に生きてきた南欧や東南アジアや日本に住む人々の自然観とは、かなり異なろう。我々のお化け調査研究に関連して2013年3月16日公開シンポジウム『妖怪学と環境問題—「お化け調査」は何を語るか—』が開催されたが、講演者の1人の菊地章太(東洋大学教授)は「自然が豊かな日本や東南アジアには様々な妖怪がいるが、砂漠には妖怪はいない」と述べている。日本を含め、各国の人々の自然観が、さらに人々の心の深層にある「素朴な宗教的感情」の形成とも結びついているのであろう。そのような自然観や宗教的感情は、社会の問題解決にも本質となる場合が少なからずあろう。例えば、吉野・角田(2010)は、高齢者問題解決のための政策立案上においても、このような自然観と宗教観の各国や地域の違いを考慮すべきとの注意を促している。

本稿では、林知己夫らの深遠な統計哲学と高度な解析により開始された「お化け調査」というニックネームの「基底意識構造調査」研究に関連させて、筆者らが現在進行中のアジア・太平洋価値観国際比較で既に得られている5か国や地域のデータの中で、関連する幾つかの質問項目とその回答分布データについて、簡単な報告を試みた。

「合理派の人々 vs 合理派ではない人々」などのパーソナリティの分類について国際比較の文脈で検討してみると、概略的には林知己夫らの先行研究を再確認する側面と、他方で、各国や地域の宗教や文化の深層とも絡むのであろう複雑な差違が見受けられ、直ちに林らの先行研究の模倣では解析を発展させるのは容易ではないことを推察させる側面が浮かび上がってきた。特に、このテーマに関して各宗教・信仰との関連の存在は容易に想像できるものの、他方で同じ宗教であっても各国や地域、個人のあり方の多様性を考慮すると、その実証的解析の困難の度合いが著しいことも想像に難くない。

本稿の報告は現在も進行中の調査プロジェクトにおいて、一部のデータを概観した報告にしか過ぎない。しかし、ここで示唆された幾つかの課題解決を含め、今後、さらに各国の多様な調査データの収集と解析を経て、人々の心の基底構造の解明のために、林の先駆的研究の国際比較版へと昇華することがあれば、本稿の目的は果たされたことになろう。

#### 謝 辞

本研究が用いたデータは、文部科学省科学研究費補助金基盤研究S(課題番号:22223006, 研究代表者:吉野諒三)によるものである。また本稿の草稿や数量化理論の適用を含め、元・東洋英和女学院大学・林文先生に再三にわたり御指導いただきました。ここに記して深謝申し上げます。また、本論文の審査プロセスにおいて、匿名の審査の先生方から貴重なコメントとアドバイスをいただきました。心から感謝を申し上げます。

#### 参 考 文 献

- ベック, ウルリヒ(1998).『危険社会—新しい近代への道—』, 法政大学出版部, 東京.  
林 知己夫(1974).『数量化の方法』, 東洋経済新報社, 東京.  
林 知己夫 編(1979a). ノンメトリック多次元尺度解析についての統計的接近, 統計数理研究所研究リポート, No.44.

- 林 知己夫 編(1979b). 政治意識の感情構造の研究, 統計数理研究所研究リポート, No.45.
- 林 知己夫(1981). 国民性の比較研究—国際比較研究の問題点—, 『日本文化の国際性と国際化の研究(昭和55年度)』, 放送教育開発センター(林知己夫著作集6. 「心比べる」, 45-75. 再収録).
- 林 知己夫 編(1984). 『多次元尺度解析法の実際(サイエンスライブラリー—統計学(13))』, サイエンス社, 東京.
- 林 知己夫(1996). 日本人の心とガン告知, 日本癌病態治療研究会 QOL 班.
- 林 知己夫(2001). 『データの科学(シリーズ データの科学)』, 朝倉書店, 東京.
- 林 知己夫, 鮎戸 弘 編(1976). 『多次元尺度解析法—その有効性と問題点(サイエンス ライブラリー—統計学(10))』, サイエンス社, 東京.
- 林 知己夫, 守川伸一(1994). 国民性とコミュニケーション(原子力発電に対する態度構造と発電側の対応のあり方), *INSS JOURNAL*, **1**, 93-135.
- 林知己夫著作集刊行委員会(2004). 『林知己夫著作集6:心比べる;意識の国際比較林知己夫著作集6』, 勉誠出版, 東京.
- 林 文(2004). 日本人の自然観と素朴な感情, *学際*, **12**, 32-38.
- 林 文(2006). 宗教と素朴な宗教的感情(〈特集〉「東アジア価値観国際比較調査」その2), *行動計量学*, **33**(1), 13-24.
- 林 文(2010). 現代日本人にとっての信仰の有無と宗教的な心—日本人の国民性調査と国際比較調査から—, *統計数理*, **58**(1), 39-59.
- 武光 誠(2009). 『知っておきたい世界七大宗教』, 角川ソフィア文庫, 東京.
- 統計数理研究所国民性調査委員会(2009). 国民性の研究第12次全国調査—2008年全国調査, 統計数理研究所研究リポート, No.99.
- 吉野諒三(2001). 『心を測る』, 朝倉書店, 東京.
- 吉野諒三(2005a). 東アジア価値観国際比較調査—文化多様体解析(CULMAN)に基づく計量的文明論構築に向けて—, *行動計量学*, **32**(2), 133-146.
- 吉野諒三(2005b). 富国信頼の時代へ—東アジア価値観国際比較調査における「信頼感」の統計科学的解析—, *行動計量学*, **32**(2), 147-160.
- 吉野諒三 編(2005c). 東アジア価値観国際比較調査—2004年度日本B調査報告書—, 統計数理研究所, 東京.
- Yoshino, R. (2006). A social value survey of China — On the change and stability in the Chinese globalization —, *Behaviormetrika*, **33**(2), 111-130.
- 吉野諒三(2008). UFOは存在するか?—お化け調査再考「合理と非合理の間」, *市場調査*, **273**, 4-13.
- Yoshino, R. (2009). Reconstruction of trust on a cultural manifold: Sense of trust in longitudinal and cross-national surveys of national character, *Behaviormetrika*, **36**(2), 115-147.
- Yoshino, R. (2013). Trust of nations on cultural manifold analysis (VULMAN) — Sense of trust in our longitudinal and cross-national surveys of national character, *Trust in Society, Business and Organization* (eds. N. I. Dryakhlov, A. Ishikawa, A. B. Kupreychenko, M. Sasaki, Zh. T. Toshchenko and V. D. Shadrikov), 213-250, National Research University, Moscow.
- 吉野諒三, 二階堂晃祐 編(2011a). アジア・太平洋価値観国際比較調査—文化多様体の統計科学的解析—日本2010調査報告書, 統計数理研究所調査研究リポート, No.103.
- 吉野諒三, 二階堂晃祐 編(2011b). アジア・太平洋価値観国際比較調査—文化多様体の統計科学的解析—米国2010調査報告書, 統計数理研究所調査研究リポート, No.104.
- 吉野諒三, 二階堂晃祐 編(2012). アジア・太平洋価値観国際比較調査—文化多様体の統計科学的解析—北京・上海2011調査報告書, 統計数理研究所調査研究リポート, No.105.
- 吉野諒三, 芝井清久 編(2012). アジア・太平洋価値観国際比較調査—文化多様体の統計科学的解析—台湾2011調査報告書, 統計数理研究所調査研究リポート, No.106.
- 吉野諒三, 角田弘子(2010). 人々の関係の広がりについて—国際比較方法論研究の幾つかの知見から—, *行動計量学*, **37**(1), 3-17.

- Yoshino, R., Nikaido, K. and Fujita, T. (2009). Cultural manifold analysis (CULMAN) of national character: Paradigm of cross-national survey, *Behaviormetrika*, **36**(2), 89–113.
- 吉野諒三, 林 文, 山岡和枝(2010).『国際比較データの解析』, 朝倉書店, 東京.



## “Obake (Ghost) Surveys” Revealing Underlying Structure of Heart and Mind: Some Relevant Data from Asia Pacific Values Survey (APVS)

Yoosung Park and Ryozo Yoshino

The Institute of Statistical Mathematics

The Institute of Statistical Mathematics (ISM) has conducted a number of cross-national surveys using statistical sampling methods to compare characteristics of people in different countries, such as the Survey on the Japanese National Character, since 1953, and Cross-national Comparison Surveys since 1971. In this context, the so-called *Obake* Surveys, conducted by Chikio Hayashi’s group since the late 1970s, intends to go one step further in an attempt to reveal the deep structure of the Japanese heart and mind.

This paper presents some relevant data collected in five countries/regions for the ongoing Asia Pacific Values Survey (APVS). We will focus on APVS questionnaire items which overlap with those of the *Obake* Surveys. In particular, we will examine Hayashi’s personality classification between “rational people vs. non-rational people” in a cross-national context, in order to identify the basic set of information upon which standards for each nation will be built. First we will explain Hayashi’s *Obake* Surveys, including its background, questionnaire items, and results. Then we will look at the APVS questionnaire items that are related to the *Obake* Surveys, i.e. religious attitudes, interest in supernatural powers, and views on life and death, so as to make a cross-national comparison of in-depth feelings. The data shows that it is not so relevant to classify people as “rational people vs. non-rational people” in other countries/regions as Hayashi did for the Japanese in the past. Although our data of the Japanese does not seem to replicate Hayashi’s result in the exactly same way, a similar classification may be given in a slightly different way to deal with categories of items. Besides, the data of the other countries/regions also roughly confirm a similar classification, but with more variations. This suggests that a certain set of items cannot give a universal scale to classify people such as “rational people vs. non-rational people.” Lastly, perspectives for future research will be given.